
織斑家の最強お父さん！

親バカ最強パパ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織斑家の最強お父さん！

【Nコード】

N7710X

【作者名】

親バカ最強パパ

【あらすじ】

ニート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに……。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろう。二人が立派に育つその日まで……。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕也！

親父、始めました。(前書き)

ネギま！にとあるが浮かばなくなったから息抜き。

もうひとつのISは真面目に書いてるから息抜きにならん。

親父、始めました。

本日は晴天なり。

空には憎たらしいほど太陽がさんさんと言うよりかんかん照っております。

自己紹介をしよう。俺の名前は織斑春樹。

年は三十路、詳しく言えば三十二歳。バリバリのおっさんをしてい
ます。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめてニート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが・・・

兄さん。悪いんだけど二人をお願いね。私達では育てられない
から・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そりゃない
ゼマイシスター」

「あ、あの・・・よろしくお願いします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。

玄関の前で肌寒くなってきた日にマイシスターの娘と息子が手紙を
持って現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿二人……！子供を押し付けて蒸発しやがったな……！

「……ん~~~~~まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します……」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞆と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどおどしながらリビングに入ると何をしたらいいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引っ張ってソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「……おい。まさか秋枝^{あきえ}はお前らを残して消えたのか？」

「……それは……」

「ああ……いい、いい。無理に話さなくていいわ」

ココアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すときっぱり少し暗い顔して俯いた。

「……んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋枝の夫）とどこかに行つたんだろ。」

昔に親父に勘当されたくせに俺を頼るとは死にたいのかあの馬鹿は？
やはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働かずに秋枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか……。

「んー、行く宛はあるか？」

「……ない、です……。」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時に病気で死んでる。

親戚はいるがどいつもこいつもろくでなしだからな……。

……仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わって俺がお前らの親父になってやるよ」

「え、で、でも！春樹叔父さんに迷惑が……きやう！？」

バチンとデコピンをするとマイシスターの娘は額を押さえて涙目で見してきた。

さあてさて。まずは組長とかおやつさんに電話するか。

「なに、するんですか・・・！」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし育児放棄したらお前らを頼むって言われたんだよ・・・あ、もしも組長ですか？お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝が育児放棄するのが見えていたようだ。

取り敢えず昔に世話になった人達に電話をして養子縁組申請せねば。額を押さえながらおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとうおやつさん。助かったよ」

『気にすんな春坊。死んだオジキからの頼みだからいくらでも言えば！他にすることないか？』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがとう。じやあな」

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするのについていけない娘に目を向ける。

「おい」

「は、ひゃい!？」

「出掛けるぞ。上着を着ろ」

「え?え?」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝を背負った時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。のろのろと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負つと身分証明書など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい・・・わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中に背負つとマンションの一室から出て市役所に向かう。

・・・到着。頭にキングクリムゾンが浮かんだのは気にしない。
養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあやす。

昔から親戚のガキの面倒を見てたから慣れたものだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・！」

「いやあああああつ！！織斑さんが子供を連れてるううううう！！」

「神は死んだ！狙ってたのにiiiiii！！」

そんな声が聞こえたのはご愛嬌。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシスターの子供は俺の養子となった。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あったがまずはマンションに帰ることにした。

「というわけで今日から親父と呼びたまえ」

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなって・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしる。部屋はまだあるからそこ使っか？そつちは俺が面倒見なきゃならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、次顔見せたら潰す」

「（・・・あ、あの人が言った通りに怖い人だ・・・）」

・・・・織斑春樹。二児のパパになりました。
娘、織斑千冬。おりむら ちふゆ 息子、織斑一夏。おりむら いちか

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。
現在住所ちよい高めのマンション。
残金・・・二億七千万。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“生ける最後の侍”ラストサムライと呼ばれる人類最強。
現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕！

親父、始めました。(後書き)

簡単なプロフィール。

織斑春樹

三十二歳

無職。ニートとも言う。

身長は184、体重は58、体脂肪率3%以下の女の敵。体は鍛えてる方。かなりの傷があり。

千冬のように黒髪を後ろで纏めて伸ばしている。目は突然変異のルビーのような赤色。顔は整い、千冬にそっくり。この場合は千冬が春樹にそっくりである。

趣味はゲームに料理。任侠の女性に学ぶ。

“最後の侍”^{ラストサムライ}と呼ばれ、人類最強の戦闘力を持つ。ISを素手で破壊するほど。

ちなみにドS。理不尽極まりない性格であり、将来は千冬がそれを
受け継ぐ。。。。。

親父、頑張る。(前書き)

取り敢えず一話だけ投稿。

というか一晚過ぎてお気に入りが増えてるのにビクって珈琲吐き出
したぞ。

前話にて千冬の年齢を七歳から九歳に変更。
こちらの方が何かといい気がしたんで。

前話のプロフィールは春樹は千冬っばい。でわかっていただければ
体脂肪率3%は可笑しいか？うちの叔父なんかリアルに体脂肪率3
%に近いんだけど。
しかも元自衛隊。

親父、頑張る。

本日は晴天なり。

ぽかぽかと陽気な日差しにより、パパは眠気がパネエです。というか日差しに当たりながら昼寝をしております。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子にサンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにNewパパさんであるわたくしは育児のめんどくささにダウンして死んでおります。

甘かった・・・夜に一夏はギャーギャー泣くし、腹が減ってもギャーギャー泣くし、俺がいないとギャーギャー泣く・・・。

軽くノイローゼになりそうだ。マイシスター、貴様はこれが嫌で逃げやがったな。

「・・・すー・・・すー・・・にへへ」

「・・・涎がダラダラやん。これ、お気に入りのシャツなんだがな」

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染みを作りまくってやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・写メって写メって〜。

二人、千冬と一夏を引き取ってからすでに一ヶ月。秋枝の馬鹿は姿は見せないから徐々に説教のレベルを上げようと思うこの頃。

千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入り料理はきんぴらごぼつである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボデーなのでミルクを飲ませてる。

昔にやったことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は会社帰りのサラリーマン並みにがぶ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほっ」

千冬にはシャツをがっしりとホールドされてるため、寝ながら足を伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でフィッシング。テレビをポチッとつけてお昼の定番の笑っていいかもを試聴。

司会のマリモさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。

日曜日なので平日に出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しながら試聴試聴。

「・・・にへへへ・・・お父さん・・・」

「あぁっ！千冬の奴、さらに涎を!？」

定番のいいかも〜!を言った途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。

長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押し退かせようとするがさらに千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部分にも染みが浸透中。

「離せ千冬！冷たいんだよゴラァ・・・あぁっ！洗濯物干さなきゃ!」

「でへへへ・・・」

仕方がなく、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。

ちなみに二人に買い与えた服は二桁を越えている。正直、服なんかわからんから適当に買った。

予算はユククにて買ったため、一万以内。

一夏はベビー　らすで服やらガラガラやらオモチヤを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家の金が消えていきます。

駄菓子菓子!!!

親父が残してくれた金をおやっさんがくれたので口座の金の桁が跳ね上がる!!

・・・最初見たときは目を疑ったね。0の桁が二つ上がったもん。
親父エ・・・てめえどんだけ貯めてたんだよゴラァ・・・。

「今日は天気がいいからもう少し干すか。というかいい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にセミよろしくへばりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばりつく千冬ごとシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込もうと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）まみれのシャツを抱き締めながら寝てやがった。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

アホーッ、アホーッ

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。自分の現状に気付くとトマトのように赤くなって暴れる。顎を殴られる。ちなみに昇 拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから二人で鍋をつつくことにした。

「夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。ミルクを飲んでいたまえ。」

「あ！お父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食つのも食われるのも当たり前なのだよ千冬！」

「！？し、知らなかった・・・！さすがお父さん！勉強になる！」

・・・ふっ。チヨロいな・・・ガキなんざこれにて封殺できるのさ。

大人気ないな俺。

そして将来、千冬を再教育するのに苦労するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをどっぴり入れて完食。二人分だから腹はちよつどいいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナニコレ？奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言う千冬の後ろにはバタバタ手足を動かす一夏。大人しくしろ。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座って緑茶を飲みながらホッと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみかんを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いといてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を連れて入浴することにした。

髪は少しずつ生えてるがまだクソ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は薄かった。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。

日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

パシャパシャとシャツの長袖を捲り、ズボンも膝まで捲った状態で一夏の体を入念に洗う。

・・・まだチ コは小さいな・・・俺は大口径マグナムだが。

「うー、あー、あー」

「ん？もう出るのか・・・って眠たそうだな。頭がカクンカクン動いてるぞ一夏」

下らない事を考えてると一夏がうとうとし始めたため、冷めないよ

うに丁寧に拭いてから服を着させてベビーベッドにダイブイン。

一夏は眠りについた！

脱力しながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言った。なのに千冬は一緒に入る！と言って聞かないため、仕方なく入浴。俺はロリコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姐さんに預けたら大丈夫だし・・・」

「そ、そう・・・やった・・・」

湯船に二人で浸かりながら話すと予定ができた。

こういうのを話していると千冬が成長していると実感できる気がする。

こうして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつものごとく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしながら
熟睡開始。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

今日も元気に過ごせました。まる。

親父、頑張る。(後書き)

しばらくはほのぼのと書きます。

この頃の千冬は捨てられてあなりました。春樹がいるため改変。原作の千冬の正確には近いが少しあれ。みたいな感じに。

ちなみにヒロインはいません。今のところは。
ー夏ラヴァーズを応援する立場になりそう。

親父、育てる。(前書き)

なんかお気に入りがスゲーんだが・・・

感想でよくあった体重の件ですがこれはいわゆるフラグです。

また詳しく書きますが出来たらそれには触れないでほしいです。

というかアクセス二日で八万とかパネエな・・・

親父、育てる。

本日は曇りのち晴れなり。

お天道様は雲に隠れ、洗濯物が乾きにくい日である。

実際にリビングのベランダに続く窓やらには洗濯物が干してあります。

そして本日は火曜日。千冬の授業参観から三週間過ぎた頃。

我輩はパパさんなので家にて一夏と遊戯中。

「あー、あー」

「いててて！髪を引っ張るな一夏！」

きゃっきゃつと笑うベビーボデーのマイサンは俺の髪を引っ張って遊んでおります。

髪を切るのはめんどくさいから簡単に整えて縛ってポニーテールにしている。

そのため、一夏の一番お気に入りのおモチヤとなっていた。なぜだ。

そして娘は小学校にて頭が痛む勉強をしている。

前の木曜日に参加した授業参観の保護者面談では千冬はリーダーシップを発揮して皆を引っ張るから助かる。などと担任に言われた。

俺が義理の父親になったことを聞いてきたがはぐらかして保護者面談を済ませて千冬と手を繋いで帰宅。千冬は終始笑顔だった。

授業参観でも千冬は特に勉強がわからないって事はなかったのでパパとしては一安心一安心。

「まむまむ」

「ぎえあああつ!?一夏、俺の髪を食べるでない!」

ポーツと一夏を組んだ脚の中につきぼり埋めて平日の笑っていいかもを見ていると一夏がポニテの俺の髪を口にくわえてもむもむ食べていた。

離させようとすればごねるため、何かないと周りを見渡す。

司会のマリモさんの声と観客の笑い声が聞こえるのを傍目に、部屋を物色する事にした。

赤ちゃん用のしゃぶり器は一夏が気に入らないから駄目。オモチヤ・・・却下。

・・・一夏って・・・なんなん？

「あー!あー!」

「いだだだだだっ!」

どうするか考えていたら一夏に思いつき髪を引つ張られ、一夏を見た。

そしたら物欲しそうな目をしてジーツと見てくるため、理解。

ミルクか。こいつ、ミルクを要求してやがる。

「あー・・・わかったわかった。準備するから待てや」

「あー！あー！あー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんだこの胸のトキメキは・・・」

両手を上げて喜びを体現する一夏を見て心がなぜかトキメいた。

・・・ああ・・・親父・・・刻が見えるよ・・・。

“いちかせんよう”と書かれた瓶に粉を入れていつものようにミルクを作ると手で少し温度を調整する。

出来上がったそれを一夏の前に置くと一夏はハイハイしながら瓶を持ってぐびぐび飲み始めた。

「あーいー!」

「……………一夏のバツクに銭湯の脱衣場が見えた……………」

銭湯の脱衣場がもやもやと一夏の後ろに浮かぶとぶはー！と牛乳瓶を飲むサラリーマン風の男が見えた。

……………疲れてるのか俺は。今から寝た方がいいのか？

多少げんなりしながら一夏のミルクを作る合間に作った焼きそばを食べながらミルク瓶を持つ一夏を眺める。

「あー！あー！あいー！あーうー！」

「……………少しは静かにできないのかおのれは。ジャングルのゴリラみたいだぞ」

なぜか一夏はチーターのごきげんようを見ながら発狂してミルク瓶を振り回していた。

……………将来は親父似だな。おふくろの要素はないわ。

秋枝はどちらかといえはおふくろの似ただけど墮落したしな。デキ婚なんかするからこうなるんだよバカシスター！

焼きそばを食い終わると一夏からミルク瓶を没収し、一緒に洗う。

「みゃーうー！」

「いだだだだっ！痛い！痛いって一夏！」

皿洗いをしていると一夏がいつの間にか台所に来て髪にぶら下がって遊んでいた。

無論、後ろに引っ張られるから首が後ろに反れ、首が変な音を立てていた。

皿洗いを速攻で終わらせると猿よろしく髪にぶら下がる一夏を抱き上げて首を回す。

バキバキ鳴った。

「あー！」

「いたた・・・元気いいな一夏。パパは体が持ちそうにないぜ」

「あーっ！」

「・・・もうどうにでもなれ。親父、昔は苦勞したんだな・・・子育て大変だ」

一夏を抱き上げてソファーに座ると一夏は手を伸ばして鼻に突っ込んだり、口の中に指を入れたりと好き放題していた。

なすがままにされていると疲れがどんどん貯まり始め、気のせいかげっそりしてきた。

・・・ホームヘルパーか姐さん呼ぼうかな？

ホームヘルパーはやめとこう。仮にも俺は四季組の組長の息子だから誰かが襲いそうだから却下。
姐さんと呼ぶにしても貞操を寄越せと言われそうだから却下。

………駄目だな。親父が生きてればなんとかだったが一人で頑張るしかないな。

「前途多難だな……」

「うー」

膝に大人しく座る一夏とテレビの再放送ドラマを見ながらどうしようかと再び思考に入る。

取り敢えず一夏が幼稚園に入るまでは家にいるようにして、幼稚園に入ればおやつさんのツテで就職するってのが今考えている事である。

小学校の担任にも仕事は何してますか？って言われたから働かねば。

二ト生活前には工事現場、四季組のカチコミ応援、外国にてテロリスト狩りをしていたな。

俺がまだ四季組の一員として動いていた頃はこんな苦労はなかったんだがな……親戚のガキって言っても小学生くらいの奴を世話しただけだしな。一夏みたいな赤ん坊ははじめてだ。

そして辛い。死ぬ。疲れる。簡単に引き取ると発言した俺を殴りたい。

すと千冬からプリントをもらい、チェック。

一夏はあーあー言いながら髪に手を伸ばすが届かず。泣きそうになれば触らせてまた・・・といった感じをしながらプリントを読み終える。

11月7日に遠足・・・よくよく見たら弁当持参って書いてるな。

・・・あれ？俺が作るのか？

「・・・ん。わかったわ、取り敢えず手を洗ってうがいへゴー。冷蔵庫にチーズケーキがある」

「いただきます！」

ダダダツと千冬が洗面所に向かうといまだに髪に手を伸ばす一夏を見てベビーベッドに収納、又は幽閉。

泣きそうな一夏を心を鬼にしてチーズケーキを出してホットミルクを出しておく。

千冬が戻ると一目散にチーズケーキにかぶりつき、完食。

「宿題あるならやっつけ。飯はまだかかるからな」

「わかった！」

「できたら檻に入ってる一夏の相手もよろしく。オムツは変えたからやらなくてよし」

そう言うと包丁でネギをとんとんと切っていく。

千冬はランドセルからプリントやらノートを出して宿題をし始めた。

「んー・・・味が薄いかな？味噌味噌・・・っと」

味噌汁の味を確認しながら味を整えて料理を作っていく。

刻んだネギを味噌汁に入れると一回、二回、三回とかき混ぜて火を止めてからテーブルをしっかりと拭いて料理を並べる。

並べると千冬を呼ぼうとテレビ前に行くとき千冬は一夏と遊んでいた。ポンポンと肩を叩いて千冬とテーブルに座ると茶碗に白米と味噌汁を入れて手を合わせる。

「「いただきます」」

千冬としつかりいただきますを言うときまずは豚のしょうが焼きを食べる。うん。うまい。

千冬を見るとパツクパク食べており、嬉しそうにサラダにドレッシングをかけていた。

俺は空の茶碗に盛り盛りと白米を盛ると二杯目を食す。

「取り敢えず弁当は作るう。何がいい？」

「きんぴらごぼう」

・・・二回目だけど・・・。

お前は年寄りか。

弁当の中身は決まったな。

まずは千冬ご要望のきんぴらごぼう。そして定番の玉子にタコさん
ウィンナー、後は子供らしくハンバーグでも入れよう。

うーむ・・・親父も違うが姐さんも料理得意だからな・・・かなり
鍛えられてるから何でも作れるが朝早く起きなきゃな。

今までは小学校の給食で弁当いらなかったから朝飯だけでよかった
が弁当となれば早起しなくては。

四季組にいた時は普通に昼前まで爆睡してたんだがな・・・。

夕食完食。皿洗いを再びやる最中に千冬を風呂に入らせる。

一夏はすでにドリームインしており、ベビーベッドで寝ている。

「・・・遠足か・・・嫌な思い出しかない。千冬には楽しんでもら
いたいものだな」

そう考えると昔のあの記憶が蘇って体がブルリと震えた。

そんなことはお構い無しに千冬は風呂から出て牛乳を飲んでいた。
・・・これ、親父の遺伝だろ。親父、風呂から出たら牛乳飲むのが好きだったからな。

皿洗いを終わると昏に洗った分まで乾燥機に纏めて入れてスイッチオン。明日の朝には終わってるはず。
着替えを持って脱衣場に行き、入浴。

・・・ああ・・・昏の疲れが癒される・・・！
こうして一日は終わるのであった。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

一夏はヤンチャである。まる。

親父、育てる。(後書き)

赤ん坊ってヤンチャだよ。昔もそうだって聞かされてたし。

ニート生活、パパ生活してますがニートは卒業しそう。

だって“僕のお父さん”でニートと書きたくないもん。

姐さんとおやつさんはISでもかなり有名な人になります。

おやつさんは・・・うん。姐さんは間接的、かな？

親父、思い出す。(前書き)

あわわわわ・・・！お気に入りな1000件以上にアクセスが十二万だと・・・！

息抜きで書いてるがメインになりそうな予感。

親父、思い出す。

本日は晴天なり。

気温、湿度共に過ごしやすい日であり、外で活動するにはもってこいである。

少し肌寒いが、服をしっかりと着れば問題はないと思う。

本日は千冬の遠足である。

場所は誰が決めたのか、動物園と水族館がある大規模な公園である。

「あー、あー」

「・・・眠いんだよー夏・・・少しだけ寝させてくれよ」

「あー!あー!」

「・・・」

そして俺と一夏は家で留守番、というよりはいつものようにだらけた生活をしている。

・・・というか一夏痛い。ペシペシ叩くでない。

今日の朝は千冬の弁当作りに早起きしたんだから眠たいの。

リビングのソファーに寝転がる俺の上ではしゃぐ一夏を眠たそうに

見ながら一夏のペシペシを止める。
そうすると一夏はあーあー言いながら髪を再び持つてまむまむと口に入れて食べ始めた。

「……一夏にとって俺の髪は食い物なのか？前も俺の髪、食われて一夏の涎まみれだったし。」

「……なんだよまた電話かよ……はい」

『よつす春樹！』

「……お客様がお掛けになった電話番号は現在使われておりません。もう一度、電話番号をお確かめの上、掛け直してくださいクソツタレが」

『なんで！？春樹、昔からなんでそんなに冷たいんだ！？』

「自分の胸に手を当ててよく考えてみる。お前、いちいち俺を騒動に巻き込んでるだろうが」

『あー……それは……すまん。体質だわ』

「余計にタチ悪いわアホウ……で？何の用だ？パパさん生活でノックアウトした俺をまたコキ使うのか？ん？」

『……いまだに信じらんねえな……あの“羅刹”だなんて言われたお前が子育てなんて……組長が知ったらどうなるんだろうな？』

「親父ならまず二人を溺愛するだろうな。あらゆるツテで大トロやから高級な食い物を用意しまくりそうだ」

『……………言い得て妙だなそれ。組長ならやりそうだが……………』

実際に俺は親父に遊園地行きたいって言ったら丸一日貸し切りにして他の客に多大な迷惑をかけたことがあるし。

他にもやることがあったが秋枝は親父に可愛がられてたからな……………親父、あのクソガキと駆け落ちした時の怒りっぷりは半端無かった。

八つ当たりに密漁船とか海賊の船を素手で沈めてたしな。止めるのに苦労した。

『お。そうだ春樹、お前に伝えたいことがあったんだった』

「あ?」

『組長がお前と千冬ちゃん、一夏くんに会いたいとき。織斑家の濃い血を継いだ秋枝さんの子供にな』

「……………ちなみに千冬と一夏はまだ子供だぞ?組長は二人をどうするつもりなんだよ……………」

四季組。日本最大の任侠に生きる日本古来から存在する武士の血を継ぐ組織と言われている。

その組長は代々“織斑”が受け継ぎ、長男が組長となると決まりがある。

そして四季組に生まれ、織斑の姓に生まれた者は名前に四季が入っている。

俺は春樹で“春”。妹の秋枝は“秋”。千冬と一夏も“冬”と“夏”がある。

親父は冬樹フユキで“冬”を持っていた。おふくろは嫁いできたからないが。

織斑家直属はみな、ある特徴を持って生まれている。

それは類いまれなる才能。

親父にしろ、俺にしろ、何かしらの人外の才能を持っている。

俺は親父には劣るがあらゆる面で才能を受け継いだ。

おかげで四季組からはバグキャラと呼ばれる人類最強の戦闘能力を持っている。

『ま、仕方がないじゃね？組長、今の内に二人を抱え込もうとしてるようだし』

「……はあ……一夏はともかく、千冬には才能がある。おそらくは“人の上に立つ”才能がな」

『でもまあ……春樹には敵わんだろ。ワンパンチで戦車を破壊できるとは』

「親父なんか第二次世界大戦で戦艦を四隻も素手で沈めてるだろ。俺なんかじゃガキみたいなもんだ」

『……………あのな。どっちもどっちだからな？』

なんで織斑家にはバグキャラしかいないんだ……と電話の向こうから聞こえてくるとブチツと切る。

いつの間にか一夏は寝ているため、久しぶりにテレビでゲームをプレイ。

千冬と一夏が養子になってから家事やらで忙しかったから久しぶりだな。本当に。

「……………なぜだ。中途半端にやる気が出ないぞ」

話は戻して四季組についてを少し話そう。

親父で四季組二代目の組長であり、歴代最強の組長でもある。二人しかいないが。

現在の組長は代理組長で俺は組長と呼んでいる。

四季組二代目の親父の息子である俺は組長にならねばならないのだが、親父の遺言で組長にはならなくてもいいと言われている。

親父は小さい頃に自由に生きられなかったからせめて息子だけは。と自由にしてくれたのである。

これだけを聞けば美談だが昔の親父を思えば感謝する気になれない。

「うー」

「やめやめ。一夏と寝とこ」

小学生の時の遠足で俺は山に行ったのだが、運の悪いことに山で熊に遭遇した。

小学生の時からずば抜けた運動神経で熊を撃退したが全治三ヶ月の怪我をし、入院することになった。

治ったのも束の間、親父は熊に負けるとは何事だ！と叫び、俺を最強の熊であるグリズリーとサシで戦わせた経歴がある。

なんとか生き残ったのだが・・・全治半年の重症の怪我を負い、入院リターン。

死ぬかと思った。小学二年生である当時の俺はグリズリーと戦うのは恐怖以外の何物でもなかった。

退院すると真っ先に親父に殴りかかったが見事に返り討ち。再び入院して一躍ナースさん達の人気者になった事がある。

退院 親父に殴りかかる 返り討ち 入院 ナースさん達のオモチヤになる 退院と永遠にループしてたのが小学校の思い出である。

碌なもんじゃねえな。

中学に上がってからは親父に勝つために知り合いの道場で鍛えながら親父に挑んだが全戦全敗。

以前は骨を完膚なきまでに叩き折られたが中学二年生から折れなくなってきた。

俺は知らないがボロボロの姿が男らしいと中学のアイドル的な存在になってたらしい。

中学三年生より道場の剣術を習い始める。

高校に上がると親父と互角に渡り合っていたが、親父は今の今まで手加減していたため、小学校の無限ループ再来。貞操をナースさんに狙われる毎日を過ごした。

親父と喧嘩しながらも勉強は怠らずにクラストップ10に入るようにはした。

道場で剣術を習いながら部活の最終兵器として活躍。報酬はあんパン七個である。

高校を卒業すると大学には行かずに親父を叩きのめすために四季組の若頭となった。

当時は日本のヤクザや外国のマフィア相手に暴れに暴れ、詐欺をし
てる組織も潰して回った。

銃弾の雨すら避ける俺を見て四季組はバグキャラ、“最後の侍”ラストサムライだ
なんて呼ばれ始めたのもこの頃である。

・・・結局、親父が六十七歳で亡くなるまで俺は勝つことができなかった。

秋枝が駆け落ちした心労で亡くなり、親父は四季組の全員に見送られながら逝った・・・が。

絶対に親父、天国にしる地獄にしる、神や閻魔相手に暴れているイメージがあるからそれほど悲しんではないけど。

「・・・親父、か・・・俺も親父なんだけどなあ・・・」

眠っている一夏を見ながらそう思うと親父の話を聞かせようか迷った。

親父の話は普通の人には聞かせられないからな・・・と思う。

俺が小さい頃から親父のチートっぷりを誰よりも知ってるからな。

一夏や千冬に聞かせたら四季組の妙なテンションに染まりそうで怖い。

孫の顔が見たい！

「ぬおっ!?!?」

いつの間にか一夏と熟睡しており、死んだはずの親父の声が聞こえると驚いて寝ていたソファーから飛び起きた。

「いたい・・・!」

「ん?帰ってたのか千冬・・・っていま何時だ?」

下を見ると千冬が額を押さえて涙目になっており、ジロリと見てきた。

そして時間を確認すると午後五時。どうやら昼前から爆睡してたようだ。

千冬は帰ってきたばかりのようで寝ていた俺を馬乗りになって覗いているとひっくり返り、痛みに堪えてるらしい。

ちなみに一夏は千冬がベビーベッドに乗せており、腹の上から消えていた。

「お父さん、もう夕方だけど寝てていいの？一夏もずっとお父さんの腹の上で寝ていたんだけど・・・」

「んあー、悪い。朝に早起したからつい、な・・・」

「うー。一夏、お腹が空いていて泣いていたんだぞ？気を付けてよお父さん」

あー、それは悪い事をしたな・・・一夏には少し高めのミルクをあげようか。

千冬は一夏の頭を撫でながら言うが反省しないと。あまり空腹にさせると成長に悪いって親父が言ってたしな。

拗ねた感じの千冬の要望、“ぎゅーっ”と抱きしめて？”により、背骨が折れる勢いで抱きしめる。

まあ、軽く・・・だが。人類最強の俺が本気を出したらスプラッタになるのは見えているから。

「えっとね！今日の遠足は・・・」

「ほっほっ」

抱きしめた後、千冬は楽しそうに遠足について話し出す。

動物園でライオンとじゃれた、ゴリラと握手した、水族館でペンギンを触った、イルカに餌をあげた。と話した。

・・・動物園のくだけはツッコミをするべきなのか？

「でね！ゆうなちゃんが弁当を交換しようってやってね！美味しいって言ってくれた！」

「それは嬉しいな」

「お父さん、料理上手だからね！」

「・・・今日の晩飯は奮発して刺身にするか。ホタテを主にして」

「本当！？」

千冬、小学生から刺身好きで特にホタテが好物な小学生らしからぬ小学生である。

誉められたのが嬉しいので奮発。まだ時間があるので千冬と一夏と買い物に行こう。

じゃ コでいいか。

そうと決まれば金だ金。財布には諭吉が数十人いるから余裕で買い物はできるだろう。

部屋着であるジーパンに長袖のシャツの上にパーカーを羽織ってから一夏のベビーカーを玄関から出す。

千冬と一夏と外に出ると鍵を閉め、ベビーカーに一夏を入れて寒くないように毛布をかけた。

「なんかいる？好きなもの一つくらい買ってやるぞ」

「・・・む。ありそうでないよお父さん」

「考えとけ。じゃ行きますか」

「おー！」

「あい〜！」

ジャ コに行き、晩飯の買い物をして千冬にホタテを食わせた。
シヨッピング中は逆ナンが多かったので疲れた。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

改めて親父がどれだけ規格外かを思い知らされた日だった。まる。

親父、思い出す。(後書き)

織斑家のくだりはオリジナルな設定です。あんまりツツコミしないでもらえると嬉しいです。

親父はこの世界の最強のチートです。また武勇伝書きたい。

親父、祝う。(前書き)

時間が少し飛びます。

天災と妹、早く出したいな。

親父、祝う。

本日は晴天なり。

寒かった冬も終わり、春、夏と季節は変わって暑い夏から涼しくなってきたこの頃。

我が織斑家では千冬と一夏で楽しく過ごしております。

なんとなんと！今日は記念すべき日なのだ！
我が息子、一夏の二歳の誕生日であるのだ！

「お父さん、これはどこでいい？」

「いいぞ」

「あー！」

というわけで今日は家のリビングを誕生日仕様にして一夏を祝うことにした。

あれから一年近く、千冬と一夏と暮らし始めたため、一夏はハイハイから立ち上がることができるようになっていた。

去年の冬には千冬の誕生日があり、その時は一夏と同様、盛大に祝った。

ちなみにだが千冬は十二月七日、一夏は九月二十七日、俺は九月十五日が誕生日である。

織斑家では生まれた季節によって名前を決めるのだが、俺は異端で夏に生まれたのに“春”を与えられた。

親父曰く、わしの親父と雰囲気似てたから。らしい。

まあ、つまりは俺の爺ちゃん、初代四季組組長の事である。

「それよりお父さん？一夏のプレゼントってあるの？」

「ん」

「？・・・まさか、あれ・・・？」

一夏にとんがり帽子を被せながらあるものを指差すとそこには大量のラッピングされた箱が積み重なっていた。

千冬はそれを見て顔をひきつらせ、指を指していた。

・・・まあ、これは四季組からのプレゼントなんだが。

組長代理や昔に親父にお世話になった奴等、おやつさん、姐さん、四季組の幹部メンバーが一夏に贈ってきたのだ。

若様にプレゼントを！ってな。

千冬の時もあいつら、一夏と同じくらいのプレゼントを贈ってきたからな。

千冬が啞然としていたから予想なんかつかなかったんだろうな。

取り敢えず中身を確認したら出るわ出るわでさすがの俺も呆れ果てた。

ドスやら日本酒やらチャカ（拳銃）やらと子供にあるまじきプレゼントがあった。

それらは四季組に贈り返して贈った奴等を血祭りにしたが。

「……お父さん、また変なの入ってないよね？」

「……不安すぎる」

プレゼントの中には髪飾りや櫛など、千冬に似合うものがあったがどれも高級品のため、少しあれである。

他にも洋服や着物を贈ってきたがそれは大事に仕舞ってある。

準備を終え、プレゼントの山を千冬と眺めていると不安のせいか、プレゼントから真っ黒なオーラが噴き出してる気がする。

「……お父さん、やってよ」

「……千冬に譲る」

「……」

手をプレゼントに向けながら俺達は見つめ合って固まる。

「……じゃん、けん！」

「ぼん！」

「ぼおおん！！！」

俺、パー。

千冬、チヨキ。

勝者、千冬。

「……………神は残酷だ……………」

「やった！去年みたいな事はしなくて済む！」

「……………変なものを見つけたらもれなく地獄への片道切符を贈ってやる。オプションで本気のゲーパンだ」

喜ぶ千冬に俺はげんなりしながらプレゼントの山の中を調べる。

……………うん。去年の千冬のプレゼントの中にパンダの子供とかいたのは驚いたな。

一時、ワシントン条約でしょっぴかれそうになったし。

四季組は日本の警察には不可侵の組織だが国際組織相手ではどうにもならん。

国を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ……………ねえ？

「・・・案外マトモだな」

「あれ？これっておしゃぶり？」

「他にはオムツやらなんやらベビーグッズが多いな」

プレゼントを開けに開けるとベビーグッズしか出てこない。
今年はヤバいものはないのか？と思いつながらさらにプレゼントを確認していく。

七割方終わると合計120ほどのプレゼントが開けられた。

その中には浴衣やらなんやらと着るものや将来に使いそうなものが
わんさか出てきた。

去年みたいなドスやら刀とかはなくて安心・・・したところにとん
でもないものが出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジでか？」

「金ぴか・・・！」

やたらと重い箱を開けると金塊がぎっしりと詰まっていた。
差出人の名前は・・・あの変態ロリコン幹部かっ！！

「返そう。こんなのもらっても役に立たん。贈り返せ贈り返せ」

「……はあ……重い……」

千冬は両手で金塊のひとつを持つと嘆息しながら元に戻した。取り敢えずその金塊の山はきっちり返すことにした。お詫びに地獄への片道切符付きで。

んー、祝ってくれるのは嬉しいがもうやめさせよう。

某大晦日の恒例のあれに出る引き出しを開けるみたいなのドキドキ感はいらん。

「おとつ、しゃー！」

「ん？」

下に軽い衝撃があり、見てみると一夏が小さな体で足に抱きついていた。

上目遣いで俺を見てきたため、抱き上げて一夏と目を合わせる。

「どろした一夏」

「お、なか……しゅいた！」

「……さすがは親父の孫……成長が早すぎるな」

この一年で一夏はかなり成長し、舌つ足らずだが少しは喋れる。第一声は“おとうしゃ”だから俺は舞い上がり、千冬は地味に落ち込んでいた。

どうやら密かにお姉ちゃんって呼ばれるのを楽しみにしてたらしい。まあ、今は“ねえちゃ”で千冬を呼んでいるけどな。千冬のやつ、俺にかなり自慢してた。

今日は運がよく、日曜日。なので千冬と一夏と遊びながら一夏の誕生日の準備をした。

ミルクを飲んでいた一夏は離乳食を食べるようになり、もう少しで三人でケーキを食べられそうでパパは楽しみです。

「・・・よし。千冬、そろそろ食べようか。時間もいい頃だしな」

「わかった！私はお皿を出す！」

「みゃー！」

「一夏も楽しみか？でもまだケーキは食べさせられないから・・・来年辺りには大丈夫だから。な？」

「みゃーうー！」

ズルいぞ！と言いたいのか、一夏は手を上げて叫ぶ。

一夏はまだ“おとうしゃ”“ねえちゃ”“おなかすいた”しか喋ることができない。

余談だが、おなかすいたは千冬を真似したようで千冬はかなり気ま

ずそうであった。

それは置いて。ヤバいので贈り返すプレゼントと保存するプレゼント、今から使う予定のプレゼントと分けると邪魔にならない場所に置く。

それから一夏をベビー用の椅子に座らせると千冬もまた、椅子に座る。

「一夏はこれで千冬はこれ。後は・・・これでいいか」

「うわ・・・またすごいね・・・」

「あいいー!!」

「当たり前。息子を祝うんだから遠慮はせんぞ俺は」

「でも一夏は食べられないよね？」

「・・・」

千冬のメスのように鋭いツツコミにより、俺沈黙。

それを見た千冬はハツとして慰めるようにわたわたと手を振る。

・・・確かにそうだけどさ・・・祝うくらいいいだろ？息子のはじめての誕生日なんだからさ・・・。

「・・・で。お父さん？また食べないの？」

「……いや。俺は食べなくても大丈夫なんだが……」

「駄目！しっかり食べてよお父さん！」

そんなこんなで一夏のバースデーケーキの火を千冬が代わりに消すと二人で料理を食べ始める。

しかし、千冬のジト目により空気が凍るのを感じた。

ビシツと俺を指差す千冬は誕生日用の手羽先をぐいぐいと押し付けてくる。

正直、俺は食べるのは好きじゃないんだがな……。

二日に一回の食事で持つし、ニート生活では丸二週間も食べなかったことがあった。

そのせいで知り合いや四季組のみんなに心配されたが死なないからいいだろ？って思う。

だが娘となった千冬により、食事は必ず三食食べるように言われた。おかげで58？だった体重が67？まで増えてしまったし……。

「……めんどくさいな……食わなくても死なないから俺は」

「駄目！」

昔に親父にグリズリーとサシで戦わせた時の他にジャングルやら雪山に放り出されたせいでサバイバル技術がプロ以上になり、食事も取らなくていいようになった経歴がある。

そのせいか、親父が死んで二ト生活をしていても餓死はしなかったのだ。

なのに戦闘力は変わらずといったまさにバグキャラなのである。俺は。

全盛期時には身長は変わらないが体重は65?と痩せ体型ではあるが体は引き締まる。といった人外の肉体を持っていたのである。

これは親父の遺伝であり、なぜかを一度聞いてみると。

「気合いだ」

と理論完全無視なお言葉をいただいた。

取り敢えず、見た目とは反して俺の肉体はスゴい。と思えばよし。

・・・誰に話してるんだ俺？

「あう！」

「も、もう食えない！食えないから！」

「ほらお父さん。手羽先はまだまだあるよ？」

「千冬・・・謀ったな!？」

「ううん。お父さんの分も食べて太ったからって・・・オコッテルワケじゃないヨ?」

・・・すまん千冬。今度から量を減らすわ。

だからその手羽先を置け!一夏はポテトを鼻に入れるな!

そんな風にして一夏の誕生日は楽しく過ごせた。

一夏、誕生日おめでとう。これからもよろしくな。

織斑春樹、三十三歳。

織斑千冬、十歳。

織斑一夏、二歳。

取り敢えず次の日に金塊贈った馬鹿を血祭りにした。まる。

親父、祝う。(後書き)

というわけでございます。春樹は食べなかったからこそ、痩せていたわけです。

というか調べてみたんだが184?で70〜80?でデブの領域に入るらしいです。

普通は67。低くても64らしいです。

医者によって意見が違ってみただけで親父はそう言った。

親父、就職する。(前書き)

二ト脱退宣言。

アクセス、二十五万越えました。ISすげーと改めて思った。

原作まで何話かかるか・・・。

後書きまで続く。あんまり信じないでね？

親父、就職する。

本日は曇りのち雨なり。

空は灰色に染まり、雨はポツポツと降っているが俺はとある場所に
来ている。

ちなみに今日は平日。千冬は学校、一夏は幼稚園に入って預けてい
る。

「採用」

「はやいなおいつ！」

とある場所、それは……

「じゃあ明日からお願いしますね。制服とかはこちらで用意します
から。あ、休日は水曜日と土曜日に日曜日でもいいですか？」

「ええ、まあ……」

「大変ですねえ……二十歳で子供二人を……」

「ちょっとストップ。……年齢、書いてますけど……読みまし
た？」

「じゃあ今の通りをお願いします・・・ところで今日の夜はお暇ですか？よかつたら私とホテルに行きませんか？」

「死ね」

会社の正社員だから、部長だからと遠慮はしない。

食事ではなくヤろうと言う面接官の女性部長に笑顔で“死ね”と言った。

・・・なのに何かに悶える姿ははっきり言って気持ち悪い。

説明は受けて大体は理解したので清掃員用の備品庫に向かうことにした。取り敢えずこの部長とは関わりたくない。

与えられた仕事はビルの清掃やトイレの清掃に備品補充。

「まあいいか」

めんどくさいがやろうか。姐さんがわざわざ紹介してくれた仕事だし。

仕事は明日からなので一夏を迎えに行くか。

「親父、移動。幼稚園到着」

「あ、おとうさん！」

「よし」

「こ、こんにちは織斑さん！」

「どうも先生。一夏を預かってくれてありがとうございます」

「は、はう……」

一夏がいる幼稚園に着くと真っ先に一夏は俺を見つけ、抱きついてきた。

そこに一夏を担当する先生が挨拶をしてきたので返す。

するとなぜか女性の先生は顔を赤くして俯いてしまった。

「あれ？せんせー、かおあかいよ？」

「な、なんでもないわよー夏君！？織斑さん、これ！伝達用のプリントです！」

「はあ……どうも……」

「で、では私はこれにて失礼しましゅ！」

わたわたと先生はプリントを俺に渡すと建物の中に走っていった。それを俺と一夏は呆然と見ていると顔を合わせて同時に首を傾げた。

……なんなんだ？

「……帰ろうか」

「うんー！」

帰ることにした。

帰る途中で一夏と幼稚園の 君は絵が上手とか、 ちゃんはいか
わいいとか、 先生がよく俺の事を聞いてきたと話してくれた。
なんで先生方は俺の事を聞いたんだ？なんかしたか俺は？

「でね！ほづきちゃんがおれにたまごやきをくれたんだよ！」

「ほー、ほづきちゃんねえ・・・可愛いのか？」

「うん！おとこっばいけどかわいいよほづきちゃんは！」

さつきから“ほづきちゃん”の事を話す一夏は楽しそうだった。好きなのか？と聞いたら好きって何？と予想外の返答がされた。しまった・・・一夏はまだ幼稚園だからそういう感情は理解できないのか・・・。

まあ、ゆっくりと教えていくか。

「で？そのほづきちゃんの上の名前はわかるか？」

「ん、ん、ん・・・し、しの・・・しの・・・しのめ？」

「東雲しのめ？また変わった名前だな」

織斑も大概だが。

それより東雲と似たあの姓を聞くとなんか嫌なんだよな。おやつさんもその姓名を名乗ってるが息子が・・・なあ？

何かと俺がおやつさんの道場に入った頃から目の敵にされて毛嫌い

されたし。

まあ・・・返り討ちにして全戦全勝だけどね。そのせいでさらに目の敵にされることになるんだが・・・。

「・・・まあいいや。ほうきちゃんと仲良くな？」

「わかった！」

話を切り上げて一夏と手を繋ぎながらマンションのエレベーターに乗る。

話しながら歩いているとすぐに着くもんだな。今まで、二人がいな間は家にいることが多いし、こんな風に話すこともなかった。

新しい日常、千冬と一夏と暮らす人生は新鮮で楽しいものだ。

二人はこんな俺を“父”と呼んでくれるのが嬉しく思う。

「おとうさん、ちふゆねえはまだかな？」

「もう帰ってるだろ。時間も四時回ってるしな・・・で？今日は何が食べたい？」

「ハンバーグ！」

「よしてきた」

一夏は喋れるようになる“ねえちゃ”から“ちふゆねえ”と呼ぶ

ようになった。

千冬も満更ではなく、千冬姉と呼ばれるのは嬉しいみたいだ。

まあ・・・それと同時に千冬も俺をお父さんから父さんと変えたから少し寂しい。

「ただいまー！」

「あ。おかえり一夏、父さん」

「ただいま。早かったな」

「うん。今日は特に用事も無かったから・・・でも明日は委員会があるから遅くなりそうだよ」

「五時くらいか？」

「それくらいかな？もうちよつと早い気もするけど」

玄関まで迎えに来た千冬の頭を撫でながらリビングに入ると一夏は真っ先に冷蔵庫を開けてケーキをかぶりついた。

あの馬鹿め・・・！手を洗ってから食べと言ったのにそのまま食べやがって！

取り敢えずケーキを食べる一夏に拳骨をお見舞いする。

頭を押さえて踞る一夏を洗面所に首根っこを掴んで猫のように連れていき、手を洗わせた。

「いたい・・・いたいよおとうさん・・・!」

「黙れ。帰ってきたら手を洗えと言っただろうが」

「うっ!りふじんだよー!ちふゆねえもそっおもっでしょ!?!」

「・・・残念ながら一夏が悪い。父さんは毎日手を洗うように言っ
ていただろう?」

手を洗わせるとテーブルの椅子にそれぞれ座ると一夏は半泣きでケ
ーキを食べ、千冬は学校からもらったプリントをズズイツと渡して
きた。

えーっと・・・懇談会?またやるのか?

「それで父さん、面接はどうだったの?」

「開始五分で採用された」

「・・・なんで?」

「俺に聞くな」

「?」

千冬はマジかよ?みたいな顔をし、一夏はフォークを口にくわえた

まま首を傾げていた。

まあそうなるわな。開始五分で採用なんて普通は不採用だと思うよな。

なんでだろうな？まさかとは思うが顔で選んだ訳じゃないよな？あの女性部長さんは。

俺の顔、童顔以外に特徴ないはずだぞ？

「・・・いやいや。カッコいい顔してるのにそれはないぞ」

「なんか言ったか？」

「なんでも。それより父さん？今度の日曜日に用事があるんじゃないかなかった？」

「ん？実家に顔出す予定だがキャンセルしたからないぞ」

「・・・そ、それなら友達の家遊びに行つていいかな？」

「いいぞ。友達は大事にしないと・・・誰の家に行くんだ？」

「東つて同じクラスの女の子なんだけど」

「ああ・・・千冬がよく話していた東ちゃんか・・・」

東ちゃんとは千冬が新しくできた友達らしい。

小学校なのに頭がいいけど孤立していたから話し掛けて友達になつたとは千冬から聞いている。

・・・お父さん、優しい子に育って嬉しい。

友達が多い千冬だが、あんな風に楽しそうに話すのは初めてのため、仲良くはしてほしいものだ。

千冬の才能の影響か、友達はたくさんできるからなあ・・・特に下の子は千冬を“お姉さま”とか呼んでるのを先生から聞いた事があるし。

「気を付けてな。家に入ったらお邪魔しますはきちんと覚えよ」

「わかってる」

「おとうさん！おれもほうきちゃんとおそびたい！」

「・・・んー、また聞いておくよ」

担当の先生に聞けば教えてくれるだろ。

しばらく話すと俺は晩飯の用意をする事にした。

一夏も手伝いをしているため、エプロンをつけて一緒に料理中。

千冬はリビングのソファアに座ってテレビを見ている。

だって・・・千冬が料理をすると暗黒物質ダークマターができるもの。

最初は頑張つて教えたのだが、きちんと材料とかも調理も完璧なのができるのは暗黒物質ダークマター。

こんなとこまで親父に似なくていいのに・・・親父も料理や家事は

壊滅的だったからな……。
反対におふくろは料理や家事は完璧であり、俺はそれを遺伝している。

「ちふゆねえ、せなかからなにかでてる」

「……見るな一夏。俺でも見ていて辛い」

リビングでテレビを見る千冬の背中には年に似合わない哀愁感が漂っていた。

……親父より秋枝の遺伝かもしれんな。あいつも家事は壊滅的だったし。

才能チートといい、いろんなところで親父似だな。千冬は。

一夏はどちらかと言うとおふくろ似だな。料理とか瞬く間に吸収するから。

取り敢えず千冬のハンバーグにはチーズを入れておこう。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

チーズ入りハンバーグを食った千冬は嬉しそうだった。まる。

明日から仕事も頑張る。まる。

親父、就職する。(後書き)

おわかりでしょうか？原作では千冬と束は高校生の時に会いましたが少し早めます。

あと等も。一夏に恋をするのでしょー！

おまけ

「は、はづううう・・・／＼／」

今日、織斑一夏君の父親である織斑春樹さんと話した。

はじめて会ったのは一夏君が入園した次の日。担当として会った時にビビビッ！と来ました！

黒く女性も羨むような美しい長髪、見据えるは宝石のような赤い瞳。二枚目より三枚目と言えそうなルックス・・・。

「き、今日も織斑さん……か、カッコよかったな……／＼／」

プリントを渡してお礼を言う時の笑顔……ダメ！顔が赤くなっちゃう！

「……またか。美弥先生、またなのか」

「織斑君とこの父親らしいよ。シングルファーザーらしいし……私も狙ってるけどね」

「ああ、わかるわかる。あんなカッコいい人、滅多に見ないもんね」

「そうそう！家事もできるみたいよ！こんな優良物件は百年に一度の逸材よ！」

他の先生方が何か言っていたが私は織斑さんとデート（妄想）しているので聞こえなかった。

は、はわわわ……そんな、ここで……。

きゃー！織斑さーん！

「おい。誰か美弥先生止める。気持ち悪いぞ」

えへへ……いつか織斑さんを“あなた”と呼べる日が来るんでしようか……。

いえ！自分でその未来を勝ち取ります！

「美弥先生が暴走したー！誰か止めるー！」

「うああああっ！？書きかけの報告書がああああっ！！」

待っていてください織斑さん！私、貴女をゲットしてみせます！
私・・・山田美弥が！！

「ぶえつくしー！」

「あれ？おとうさんかぜ？」

「かな？風邪薬飲んど！」

なんて事があったりなかったり（笑）。

あくまでもフィクションなので気にならずWWW

親父、出会う。(前書き)

ちょっと早いけど。

風邪が治らん。しばらく執筆できないので妄想しながらお待ちを。

親父、出会う。

本日は晴天なり。

少し雲が出てきているが雨は降らないようなので洗濯物を干している。

今日は千冬に言われ、滅多に出ない外に一夏と外出している。

俺がとある会社の清掃員として働き始めて三週間ちよつと。

千冬は小学五年生、一夏は幼稚園に馴染み始めている。

まあ、一夏は月、火、木、金しか幼稚園には行かないが。

「おとうさん、ちふゆねえはいつかえってくるかな？」

「んー、もう少しじゃないか？時間的にもそろそろ学校は終わる頃だし」

俺は左手、一夏は小さな右手で手を繋いで歩きながら右手でポケットから携帯を取り出して時間を確認。

現在は午後三時半である。

「・・・迎えに行くか？」

「いく！あとなにかたべたい！」

「ならコロッケかなんかを食べ歩きするか。場所は・・・商店街のおっちゃんからもらおう」

「コロッケ!? おれ、だいすきなんだ!」

「おうおう。じゃあ行くところか。千冬の方も買ってな」

「うん!」

一夏は三歳。大体は喋れるようになり、歩くことも出来るようになったのでこうしてたまに散歩をするのが新しい日常になった。

散歩の途中にて食べ歩きをするのが一夏の楽しみになってたりする。

・・・千冬に言われてから外に出るようにしたらまたもや体重が増えた。原因は食べ歩き。

よくわからんが一般より少し重い体重になってしまい、絞るのにも苦労した。

昔から親父に体重はなるべく減らしておけ。と非人道極まりない発言と肉体的用語による発言により、染み付いた習慣になりつつあった。

千冬のおかげでもうそれは無くなったがまだ断食の習慣は直りそうにない。

「おとうさん? きいてるの?」

「・・・ああ、すまん。聞いてなかった」

「もう！ちゃんと生きてよ！おれ、しょうらいはちふゆねえやおとうさんをまもれるヒーローになりたいんだよ！」

「ん。なれるんじゃないか？・・・親父の遺伝なら間違いなくチートな戦闘力ありそうだし（ボソツ）」

実際に俺は一夏の年、いや、五歳から才能の片鱗が現れたことがある。

本格的にそれが目覚め始めたのは遠足の熊戦。そこから急激に伸びて今じゃ、親父に次ぐ人類最強なわけだ。

一夏はぶんぶんと怒っているようだがコロツケを買い与えて機嫌を直した。

「じゃあ行くこうか」

「おー！」

親父、息子、移動

所変わって千冬が通う小学校の校門。一夏と手を繋ぎながら待機。

「・・・ちふゆねえ、まだかな？」

「もう終わってるはずだからもう少し待てば来ると思っよ」

もむもむとコロツケを食いながら千冬を待つ親父と息子。視線がバシバシ感じます。

「ねえ、あの人がカッコよくない？」ひそひそ

「うん。モデルさんみたいだね」ひそひそ

「結婚するならああいう人がいいね」ひそひそ

「わたくし、あの方に求婚しますわ！田中！あの方の経歴を調べなさい！」

「かしこまりましたお嬢様！」

という会話は二人には聞こえなかったが親父は間違いなく最後のお嬢様に狙われるだろう。

「……あ！ちふゆねえだ！」

「ん？」

時間にして七分待っていると校舎の玄関から千冬と変わった髪色の少女が出てきた。

「……？千冬、なんか嫌そうな顔してるな？どうしたんだ？」

「……おとうさん、あいつだれ？」

「……なんだあのガキは……」

千冬と少女は足早に玄関から出てこちらに歩いてくるが後ろからニヤニヤとここからでもはつきりとわかる気持ち悪い笑いをしたガキが追い掛けていた。

「……取り敢えず殺すか。」

「おい千冬ー！」

「……！……父さん？どうして……」
「……夏まで」

「どうしたんだ千冬？こいつ、お前の知り合いか？」

「あゝ？ガキ、年上には敬意を払え。親から教わらなかつたのか？」

千冬を呼ぶとランドセルを持ち直して少女と走つてくると後ろからまたもやガキが追い掛け、俺を指差しながら千冬になれなれしく話していた。

千冬も少女も嫌そうにしてるのがわからないのかこのガキは？

一夏を肩車すると千冬の手を取ってそこから離れるように歩き出す。千冬は少女の手を取って歩くがガキが回り込んで邪魔をしてきた。

「おいオッサン、俺の千冬になれなれしくしてんじゃねえよ。てめえ、誰だ？」

「・・・喧嘩売ってんのかクソガキ。年上には、敬意を、払えと、親から、教わらなかつたのか？あんまりしつこいとお前の親に話すぞ。うちの千冬をつけ回してるってな」

「はっ！嫁と話していて何が悪いんだオッサン？俺は選ばれた者なんだから何をしようと勝手だろうが」

なんなんだこのクソガキは・・・！いいよな？殺してもいいよな？親もろともぶっ殺していいよな？

プルプルと震える手を見た千冬が慌てて止めるが止めるな。殴り殺してくれる。

「おいオツサン。その手はなんだ？俺を殴っていいのか？俺は“如月コーポレーション”の御曹司だぞ！！」

「……………如月コーポレーション？……………あいつの息子か……………」

目の前でドヤ顔をしてるクソガキを無視して顔を改めて見てみる。
……………似てない。金髪に黒と赤のオツドアイだなんてまるで似てない。養子を引き取ったのか？

如月コーポレーションとは日本有数の大会社のひとつではあるが、残念ながら四季組の下にある会社である。

その社長とは親父を通して知り合いのため、顔は知っている。

……………さて。如月コーポレーションの御曹司と言っていたが四季組組長息子である俺の方が立場は上。どうしてくれようか……………。

「父さん、もういいから行こう。こんな奴を相手にしても時間の無駄だよ」

「……………同感だな」

いまだにドヤ顔をするクソガキを押し退けて一夏、千冬、少女は学校から離れる。

「おいオッサン！俺の千冬に手を出すなと……」

「ああ、クソガキ。自己紹介がまだだったな……」

ガシッとクソガキの頭を掴むと顔を覗いて低い声で脅すように言う。

「織斑春樹。千冬の父親だ……次に千冬に近付いたら……わか
ってるな？」

「なっ……！？千冬に父親はいないはず……ぶべっ！？」

クソガキを離すと尻餅をつく。

その間に三人を連れてそこから離れると通学路を真っ直ぐ通り、帰
路につく。

「なんであんなクソガキと会ったんだ？」

「知らない。転校してきた時からなれなれしくしてきたから」

「……なぜ相談しなかったんだ？」

「最初はただ単に話をしたいだけだと思った。でも転校して二週間
経つとあんな風にエスカレートしたんだ……」

帰路、商店街を通る道で俺は千冬から話を聞いている。

あのクソガキは二ヶ月前に転校してきたよつで千冬を見た時から何かとつけ回したりしているらしい。

取り敢えずそれを学校側に電話しておいた。仮に如月コーポレーションから圧力が掛けられても潰すから問題はない。

「それで・・・君は千冬のお友達かな？」

「うるさいよ。ちーちゃんの父親だからって気安く話しかけるな」

ビキッ

千冬の隣を歩く紫色の髪をした少女に話しかけると拒絶される。罵声はプラスチックアルファ。

「東！ごめん父さん、東は人見知りか激しくて・・・」

「インダイインダ。オレハオコツテナイカラネ？」

「おとうさん、なんかへん」

「ナニカイツタカイチカ？」

「なんでもありませんぐんそう！」

ピシッと敬礼する一夏。失礼だな・・・俺はイツモドリダゾ？
千冬は紫色の髪をした少女に何かを話しているが、俺とは違ってし
っかり話を聞いていた。

・・・なぜだ。千冬の才能の毒牙にやられたのか？

「いいか束？いくら束でも父さんを馬鹿にしたり、無下にすることは許せない。私は父さんが好きだし、尊敬してるからな」

・・・千冬、父さんは嬉しくて涙が出そうです・・・。

「・・・あいつが・・・ちーちゃんを・・・」

「む？どうした束？」

束と呼ばれた少女は俯いており、千冬が話し掛けるとガシッと肩を
掴む。

髪が垂れてるため、顔は見えないがこれを俺は知ってる。

姐さんの病みモードの空気だ・・・。

「た、束？痛いんだが・・・」

「ちーちゃん」

「いつ……」

「東さんはね。ちーちゃんが大好きなんだよ。他の奴なんてどうでもいいくらいにだよ？あ、篝ちゃんは別だよ？東さんにはちーちゃんと篝ちゃんがいれば地球が滅んでも人間が死んでも構わないんだよ？あ。でもそれじゃあ地球には住めないね。ちーちゃん、東さんと篝ちゃんと宇宙に行こう。誰もいないちーちゃんと篝ちゃんと東さんだけで一生一緒に暮らそう！できたらちーちゃんの子供も欲しいな。男の子はいらない、女の子が二人欲しいよ。あ、大丈夫だよ。ちーちゃんの愛があれば東さんは妊娠できるからね！んー、少しだけ待ってて。東さん達が学校を卒業するまでには宇宙船と人類を滅ぼすウイルスを作るから。でも核もいいかもね。それなら綺麗さっぱり消えるから……ウフフフ。ちーちゃん、君は……東さんだけのものだよ……？」

……百合か？

「お、おとうさんこわい……！」

「ああ大丈夫大丈夫。怖くない怖くない」

東ちゃん……だったか？見事に歪みに歪んでるな。

姐さんの病みモードもあれだがこの子も似たり寄ったりだな。

まさかこの年でヤンデレとは・・・千冬の将来真っ暗だな。

「だからね」

「・・・ん？」

東ちゃんは俺の目の前に立ち、狂気を孕んだ虚ろな目で俺を見てくる。

・・・似ている。かつての俺のように世界から認められなかった）
・・・（時と同じ目をしている。

「お前を殺して・・・ちーちゃんをもらおうよ」

ならば・・・俺は親父にしてくれたようにこの子にも見せようか。

世界は広いことをな。

「・・・面白い。俺相手にそこまで言うとはな・・・いいぜ。相手
になつてやるよ・・・“東”^{たはね}」

「気安く名前を呼ぶな！ちーちゃんに呼ばれるためだけにある名前
なんだ！」

「と、父さん!？」

「心配するな。俺の事は知ってるだろ？死にやしないさ」

これが・・・世界を変える“篠ノ之束”しののの たばねとの出会い。

ファーストコンタクトは最悪だが、将来には“天災コンビ”と言われるのはまだ先。

そして“天災夫婦”とも言われ、娘や乙女に命を狙われるのもまだ先。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十一歳。

織斑一夏、三歳。

帰ったらコロッケ食べてたこと、千冬に怒られた。まる。

親父、出会う。(後書き)

束は最初は敵対します。

まあ、デレるけどね！天災夫婦としていちゃらぶさせたい！

はまだ未定。ハーレムっぽくはするけど。

前の山田美弥、出そうか迷う。やまやの姉って設定で。

親父、思う。(前書き)

苦情は受け付けません。なんか浮かんだもん。

・・・熱に浮かされてるせいかな？

お気に入り二千件突破しました。ありがとうございます！

アクセスは416739アクセス、83672ユニークを越えました。

すげー上がりようだな。

親父、思う。

本日は雷鳴轟く嵐の日なり。

外の空は雨と雷がどしゃ降りであらねず、家にいる奴もいるだろう。ニュースでも台風って言って警報が出ている。

そんな中、俺は……。

「あああつ！またやられたかつ！」

嵐の中、港にあるコンテナなどがよくある倉庫の中に頭を掻きながら立っていた。

周りにはここらを縄張りにする不良達が倒れている。

こんな状況になっているのは彼女、東の仕業である。彼女と出会い、宣戦布告されてから早五ヶ月。彼女にあらゆる襲撃を受けている。

十一月に出会ってから五ヶ月が過ぎたため、千冬はまたひとつ年を取った。

今月は四月。だがそろそろそれも終わりそうである。

「……取り敢えず帰るか。懲りたらもうシヤブ（覚醒剤）なんか流すなよガキ」

「うう……くそが、てめえ……誰なんだよ……」

「名乗る必要はない」

そう言うと倉庫の大きな扉を開けて嵐の中に立つ。

彼女はあらゆる手で俺を亡き者にしようとし、今回は覚醒剤をばら蒔くグループを挑発して俺を殺すように仕組んだ。

返り討ちにはしたが。今回でこのような手は七十八回目である。毎回毎回彼女が誘拐されたと嘘をついて倉庫や廃ビルに行くようにするような事を思いつく彼女の頭脳は凄いな。

……そのせいで鈍っていた体を鍛え直されたから全盛期の実力が戻り始めている。

ん？どれくらいかって？取り敢えず大型車を殴り飛ばせるんじゃないか？

全盛期には戦車を素手で破壊できたから鈍りに鈍りまくったな。うん。

嵐の中、走りながら飛んでくる街路樹を蹴り飛ばしたりする。

「……俺もお人好しだな……嘘だとわかってても動くからな」

ため息をつきながら自宅を目指して走る。

つーか雨凄いな。ジャングルのスコールみたいだな。

懐かしいな。親父に連れられて鍛えた時もジャングルには行ったな。
・おかげで半端ないサバイバル技術が身に付いたけど。

他にも気絶してる間に親父にイカダに乗せられて太平洋に放置されたこともあったな。

・・・鮫、怖い。

「ただいま」

「おかえりおとっさ・・・わわわっ、おとっさんびしょぬれ！ちふゆねえー！」

「なんだ一夏、今私は・・・と、父さん！？なんでびしょ濡れなんだ！？一夏、タオルタオル！」

「わかったー！」

「あ、ストップ。風呂に入るからいい」

家、マンションの自宅に帰ると案の定、千冬と一夏は慌てたようにバタバタと走り回る。

それを苦笑しながら見てびしょ濡れになった靴を逆さまにしてぶら下げて乾かす。

びしょ濡れのまま、風呂場に向かうと廊下に水が溜まっていく。

それを千冬と一夏が拭こうとするが自分でやると言い、脱衣場にて濡れた服を全部脱ぎ、洗濯機に放り込んで風呂場入室。

温かいシャワーを浴びながら今日の出来事、彼女について考える。

彼女・・・束は頭がいい。それも同年代より遙かに、大人よりも。そのせいで友人や身近な同年代の子と距離を置かれてるのかもしれない。

実際に千冬から聞くとクラスでも孤立しているらしいな。いじめもあつたようだし。

・・・似ている、な・・・昔の俺に。残酷なほど、切ないほど、何もかもが、全てが俺が悩んだあの日と。

「・・・親父・・・俺はあの子を助けられるだろうか・・・」

かつて親父と姐さんが助け出してくれたあの日、おふくる・・・母さんが死んだあの日からの地獄から。

母さんは生まれつき、体が弱かった。

でも心は強かった。親父はそこに惚れたと言っていたが今思えば母さんほどの女性は今まで見たことがない。

俺はそんな母さんが好きだった。気高く、優しい母さんが。

そんな母さんに甘えた俺は信じられなかったのだろう。

母さんの突然の死。

死因は教えてくれなかったが体が弱かったせいで死んだと舎弟から聞いた事がある。

まだ四歳の俺は信じられなかった。母さんの部屋で顔に白い布を乗せられた母さんが寝ているのは。

子供ながらに俺は理解してしまった。

母さんは・・・もう帰ってこないと。

それが信じられなくて、嘘だと思いたくて泣いた。延々と泣いて暴れて・・・。

その日から俺は誰も信じられなくなった。部屋に閉じこもり、飯も食べずにずっと。

親父や舎弟の皆は何かと手を尽くしてくれたが俺は母さんの死が受け入れられなかった。

「・・・なんで俺はあんなに塞ぎ込んだんだろうな。親父や姐さんもいたのに」

苦笑しながらシャワーを止めると風呂場から出てタオルで水気を拭く。

千冬か一夏が用意したのか、着替えがあり、それをズボンだけ着るとタオルを肩に掛けてリビングに入った。

「あ、出た・・・父さん！ちゃんと服を着てよ！」

「いいじゃねえか別に。風邪をひくわけじゃないし」

何かを読んでいた千冬は顔を赤くして服を着ると言ってきた。

前までは一緒に風呂に入ってたのにな。と思いながら冷蔵庫からビールを取り出して一息で飲んだ。

あの日が変わり始めたのは姐さんと出会った日からだったな。

『やあはじめまして。君が春樹くんかな？ボクは。よろしくね』
『？』

そうやって姐さんは笑いながら握手をしてきたが当時の俺は気に入らなかった。

その笑顔が、母さんとダブったから……。

俺は拒絶し、姐さんを殴った。

でも姐さんは殴られても止めようとはせずただ俺に殴られ続けていた。

『フフフ……君がボクを殴って気が晴れるならいくらでも殴られてやるさ。君のお父さんに頼まれたからね』

そう言う姐さんにまたも母さんがダブリ、辛くなった。

部屋からは出なかったがその時は怖くて、母さんがいなくなるような気がして家から飛び出した。

無我夢中に飛び出したため、迫りくるトラックに気付かず走っている。と姐さんに助けられた。

最初は何があつたかわからなかったが姐さんが俺を抱きながらコンクリートの地面に寝ていたのを見ると親父達が駆け寄ってきたのを見た。

・・・そういえば親父のやつ、トラックを海に向かって蹴り飛ばしてた気が・・・。

と、とにかく！姐さんは頭を少し打つただけで命に別状はなかった。簡単な検査で退院した姐さんは真つ先に俺のところに来た。

『春樹くん、君は大丈夫だったかい？怪我はなかったかい？』

その時の姐さんは俺が最後に見た母さんの優しい笑顔をしていた。それで感極まって俺は思いつきり泣いた。枯れたと思った涙を流した。

姐さんは何も言わずに俺をあやしてくれ、それに甘えた。

まあ・・・それが俺が体験したこと。

彼女、束は俺とは違うが似たような苦しみを持っているだろう。

母さんという支えを失った俺、本当の支えがない束。似ている。

「それより父さん、何してたの？こんな嵐の中で傘も差さずに」

「傘は飛んだし、仕事があったし。お前らは休みでいいな〜・・・
というわけで八つ当たりで今日の晩飯はゴーヤチャンプルーオンリ
ーだ」

「え〜！またあのにがいの！？」

「理不尽だぞ父さん！せめてご飯を付けてくれ！」

「おかゆな。おかゆ」

ギヤーギヤー叫ぶ千冬と一夏をにやにやした顔で見ながらテレビを
つけてみた。

嵐の影響か、見にくかったがニュースは見れた。

『怪奇！湖を走る女性！？』

「・・・なんじゃこら？」

「えー、こんなよりあいぼう！あいぼうがみたい！」

「人が湖を走るのか・・・？そんなの父さんくらいじゃないのか？」

「千冬、お前はゴーヤチャンプルーと納豆を混ぜたものを食べ」

「ごめんなさい。私が悪かったです」

深々と頭を下げる千冬。そんなに嫌か。親父はそんなゲテモノ料理を俺に食わせたことがあるんだぞ。

『あ、これです！これが湖を走る女性です！』

「どうせCGだろ。こんな悪戯を誰が信じるんだ馬鹿野郎」

「……でも父さんならできるよね？」

「むしろ海を走れるぞ俺は。密漁船を沈める時にやったことがある」

沈黙する千冬に訳がわからないといった一夏。

俺は二本目のビールを飲みながら再びテレビを見るとその女性がインタビュ―された映像が映し出され……。

『やつほー。春くん元気かなー？』

「ブ
ッ！！」

「うわっ！？」

「ひゃっ！？」

そこに映し出されたのは姐さんだった。

それを見た俺は口に含んだビールを盛大に吹き出した。

な、な、な、な、な、な、な、な、なんで！？なんで姐さんがテレビに……？

よくよく見ると映像提供ロシア某局と書かれていた。

まさか姐さん……ロシアでまたやったのか（……………）？

『春くん、元気かな？できたら連絡ほしいなー！ボクに君の声を聞かせて？』

『……あの、誰ですかこの人は？』

キャスターが戸惑うが仕方ないだろう。

姐さん、別名は“理不尽女王”だからな。下手に干渉すると心がへし折られるぞ。

テレビには昔、最後に会った時から変わらない姐さんの笑った顔が映っていた。

……不老不死かあの人。俺より十以上年上のはずだぞ。

なんで二十歳から顔が全く変わってないんだよあの方は……親父もだがなんで姐さんも化け物チートなんだ？

「おとうさん、しりあい？」

「……うむ。正確には親父の知り合いで昔に世話になった人だ」

「お祖父さんの？父さん、でもあの方は二十歳前後に見えるけど」

「あれで十三歳年上だ。俺よりもな」

ピシッと固まる千冬。一夏は相変わらずのほほんとホットミルクを飲んでいた。

姐さん・・・偽名だらけでわからんが俺に名乗ったのは安心院なじみ（あじむ なじみ）だったか？

前に立ち読みしたジャンプのキャラに似ているのは間違いない。

確か・・・さ、さ、さ・・・なんだっけ？ロシアにある対暗部用暗部の十六代目の当主だった気がする。

なんだが都市伝説では姐さんはその暗部の創始者で初代当主って噂があるが・・・どうだろ？

親父にひけを取らない戦闘能力、よく回る頭、絶大なカリスマ・・・それが姐さんである。

なじみさんと昔は読んでいたが姐さんと変わったのはとある舎弟から聞いたこと呼び始めたのである。

・・・まあ、とある舎弟Aは姐さんに折檻されて入院したが。

何を隠そう、俺のファーストキスは姐さんに奪われたのである。

小学五年生にご褒美に軽いキスをするはずだったが姐さんに舌まで入れられて喰われる一歩手前だったと記そう。

親父に助けられなかったら大切な何かとお別れをした気が・・・。

「……どういう関係なの？かなり親しいみたいだけど……」

「……そんなに睨むな。何を不機嫌になってるかは知らんがみたらし団子の串が折れてんぞ。」

「さっき言ったがお世話になった人だ。おふくろが死んでからは母親代わりをしてくれてた」

「……ふーん……本当？」

「……なぜ疑う？そりゃあ、ファーストキスの相手は姐さんだが……」

バキィッ！

「ひえっ！？」

「……おい千冬。したんじゃなくて無理矢理されたからな？俺からは一切してない」

「……ふ、ふふふ……こいつは敵敵敵敵……」

折れた串を握りながら千冬はぶつぶつと呪詛を唱えながらテレビの

姐さんを睨んでいた。

「・・・束もそうだが千冬も大概ヤンデレだな。どこで育て方を間違えたんだ？」

延々と呪詛を唱える千冬に怯える一夏と晩飯を作ることにした。その途中で束からどうやったのか、俺の携帯にメールが送られ、脅迫じみた内容が書かれていた。

「・・・そういえば束って名字何かな？知らないんだけど。」

「え？束の？束は篠ノ之ささののだけどどうかした？」

「・・・は？」

「あ！それぞれ！ほつきちゃんのなまえもそれだよおとうさん！」

「・・・し、篠ノ之・・・？千冬、一夏、マジでか？」

「」「うん」「」

「・・・うわぁ・・・東雲じゃなくて篠ノ之・・・あの馬鹿の娘かよ！
つてことはあの人の孫・・・理解した。生まれるべくして生まれたんだな。彼女は。」

「・・・一夏、会いに行くぞ」

「え？」

「篠ノ之なら俺も知ってるからな。挨拶するついでに東の話聞きに行こう」

「父さん？なんで東の名字でそんなに慌てるんだ？」

「……………
篠ノ之んこの先代、つまりは東の祖父なんだが……俺の、師匠なんだよ」

「……………え？」

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十二歳。

織斑一夏、三歳。

今日の夜、夢に姐さんが出てきて喰われそうになり、怖かった。ま

親父、思う。(後書き)

安心院なじみはめだかボックスのまんまです。

最初は姐さんは哀川潤辺りにしようかと思ったけどめだかボックス見てこっちにした。

まあ・・・暗部の十六代目、といったらあれです。わかる人はわかるかな？

近い内に出すけどちょっと設定、あります。

次回は篠ノ之神社へゴー。

千冬も大概ヤンデレだな。おい。

親父、殴り込む。(前書き)

ちよつと長め。

オリキャラ？出ます。

親父、殴り込む。

本日は晴天なり。

季節外れの台風も去り、嵐も嘘のように過ぎ去った。雨が降ったせいも、少しジメツとしていたが特には気にならなかった。

「……おとうさん、ここどこ？」

「篠ノ之神社。懐かしいな……かれこれ親父が死んでからだから……十二年か。何も変わっていないな」

現在、我ら織斑ファミリーとはある神社に来ている。

名前は“篠ノ之神社”。昔に修行していた時に住んでいたことがある場所である。

今日は束に会うためと一夏の言うほつきちゃんとやらに会うためにここに来た。

まあ……師匠、怒ってそうだな……。

「お。ここだここだ」

「……道場？大きいね」

「まあな。かなり昔に建てられた武家屋敷を改装したらしいから広いのは当たり前。さ・て・と・・・・」

神社の裏。少し分かりにくいがそこには木の扉があり、そこを開けると庭があり、その先には道場があった。
千冬と一夏ははくっ后感心する。

その間に俺はゆっくりと道場に近付くと中から僅かな音が聞こえる。なるほど・・・練習中か・・・好都合だな。

ニヤリと笑うと千冬と一夏に待機するように言う。
でもついてくる。と言うので何があっても手は出さない、口は出さないと約束をした。

「んじゃ・・・たのも~~~~~~~~!!」

ドゴオンッ!!

「え!?!」

「わっ!?!」

「お邪魔します。道場破りです!」

やったのは道場の扉を蹴り開けずかずかと中に入る。

中に入れば袴を着た男女が竹刀を持ったまま固まっております、俺は靴を脱いで跨ぐ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前か春樹・・・」

「ういつす！柳韻、元気にしてたか？」

苦虫を万単位で食い潰したような顔をするダンディーな男は腕を組みながら俺を嫌そうに見ていた。
そいつの名は篠ノ之柳韻しののりゅういん。篠ノ之神社、道場の現当主である。

「お前は昔から変わらん。二十歳の時からまったく老けてない」

「体質だ。親父も似たようなもんだろ？」

「・・・・・・・・まあいい。何をしにきた春樹？」

「道場破り。てめえがどんだけ強いかと俺がどんだけ力を取り戻せるか知りたい」

「・・・・・・・・ふん。まあいい・・・積年の恨み、ここで晴らさせてもらっぞ」

「それ、負けフラグだから。俺、カッコいいと思ってるようだが力ツコ悪いぞお前」

「・・・・・・・・殺す！！春樹、貴様は何も変わってないのか!？」

「変わったぜ？体重と好物が。酒とマグロに加えてケーキをプラスだ」

「ぐっ……貴様ぁ……！」

「やるの？やんのか？やんのかゴラ？てめえ、一度も俺に勝てなかつたくせにいきがんじゃないやねえぞ柳韻」

「春樹iiiiiiiiiiiiっ！！」

「あ。千冬に一夏、下がってな」

ぽかーんとしている千冬と一夏を壁まで押してやると木刀……ではなく真剣を持った柳韻がこちらに向かってきた。

「いいねえ……達人の殺気、それは衰えていた俺を目覚めさせる……」

「はあああああああっ！！！」

「楽しませてもらうぜ柳韻!」

「あ、いちか・・・あのひとは?」

うらあつ! 親父直伝のラリアットオ!!

ぐっ・・・!

「あ! ほづきちゃん! おれのおとうさんだよ! まえにはなしたよね?」

「うん・・・すごい、さわがしいね・・・」

なんかスゴいパンチ(右ver)!!

ドッゴオオオオン!!

ぐぬおっ!?! 道場の壁に穴が!?

「ちーちゃん！東さんに会いに来てくれたの!？」

「東・・・ほら。父さんだよ、なんかお前の父さんと知り合いみた
いだぞ?」

「・・・あの腐れ野郎が・・・」

チエストオオオオオ!!

なんの！織斑家必須科目『指で真剣白刃取り』!!

カッキイイイン!!

な、なんだと!?

ウイイイイイハアアアアア!!

ぐばあっ!!

「え?いちかのおとうさんとちちつえはしりあいなの?」

「ああ。父さんは君のお祖父さんの弟子と聞いたんだが・・・」

「じいさまの?あの、あなたは・・・」

「あ、すまないな。織斑千冬、一夏の姉である人の娘だ」

「は、はじめまして……しののほづきっていいいます」

親父直伝！『手刀で何もかも叩き斬れ』！！

ズッパアン！！

や、やめる春樹！道場が崩れる！！

ふははははは！！なんか楽しくなってきた！！

「おれ、おりむらいちか！おねえさんは？」

「……君、ちーちゃんの弟？」

「うん！ちふゆねえがいつもお世話になってます！」

「……うん。君はいいかな？私は篠ノ之束。束さんと呼ぶがいいっくん！ぶいぶい」

篠ノ之流古武術奥義……

させつかあ！織斑家必須科目『骨まで砕けるコブラサイント』

！！

ギチチチチッ！！ゴキキキキッ！！

ぐぎゃ ああああああ！？

・・・師範代が手も足も出ないって・・・あの何者？

師範代と仲はいい、のかな？喧嘩して昔の事も話してたみたいだし。

「東は何か聞いてないのか？」

「興味ないし知りたくもないよ」

「・・・つよい・・・いちか、いちかのおとうさんつよいね・・・」

「うん！まえにくまをなぐりころしたっていったよ！」

おい、聞いたか？熊を素手で殴り殺したってさ！

まさにバグキャラ・・・師範代、立場無いね。

ドッゴオオオオン！！

おらおらおらあ！！柳韻、弱くなったんじゃねえのか！？

ちよ、まつ、ちよつと待て春樹！

模擬戦終了。

勝者、織斑春樹。

決め技、シャイニングウィザード改。

MAX HIT、28 HIT。

被害・・・道場。

門下生三名（ラ インパクトの流れ弾に命中）。
師範代、篠ノ之柳韻。

「あっはっはっはっは！悪い悪い！ついやりすぎたわ！」

「春樹貴様あ！道場の修理にいくらかかると思ってるんだ！？」

柳韻との模擬戦、もとい俺のワンサイドゲーム終了後、道場は穴だらけになっていた。

他にも門下生数名がラ インパクトに当たり、アフロになっていた。

最大の被害を受けた柳韻は軽く頭に包帯を巻いて道場の無事な床に座って俺を睨んでいた。

当の俺は爆笑しながら柳韻の肩をバシバシ叩いているが。

その近くには千冬に束、一夏に箒ちゃんが道場の穴が開いた場所をつついたり、残骸を持っていた。

「・・・お前、体力が落ちたな？昔ならもつと鋭い動きができるだろっ？」

「あー、お前にはわかるか・・・親父の言う“気”も下手になっただし」

「まあ・・・今までサボっていたツケだろ。なのにあの戦闘能力・・・化け物め」

「その化け物と戦ってその程度で済むお前もお前だからな？」

不良やヤクザ相手に暴れたから勘は戻ったが体力等はまだ微妙な感じである。

ラインパクトは某野菜少年が主人公の筋肉バグキャラの技だが、“気”を使うからな。

昔なら本気でやれば駆逐艦を消し飛ばせたが本当に衰えたな。

柳韻は真剣を鞘に納めながらため息をつく。

んだゴラァ・・・殴り殺してやるっかあん？

「春樹・・・もう大丈夫なのか？」

「ああ。親父が死んだのは仕方がないと振り切ったよ。くよくよし
てたら親父に殴られるからな・・・それにガキもできたからな」

「・・・信じられんな。あの春樹が子供を持つとは・・・昔から子
供に好かれていたが・・・」

なんでこう、昔からの友人は信じられないみたいなの顔をするんだ？
子供は昔から好きだし、好かれていたし。だから何の問題はないだ
ろ？

少し大きめの竹刀を持つ千冬、箒ちゃんが使っているだろう竹刀を
持つ一夏を見ていると柳韻もまた、二人を見ていた。

視線に気付くと千冬は軽く微笑み、一夏は満面の笑顔で竹刀を持ち
ながら手を振っていた。
それを微笑ましく思い、手を軽く振り返した。

「父親らしくしているな春樹。かなりなついているじゃないか」

「まあな。可愛くて堪らん。邪魔するやつを二分で消し炭にできそ
うだかな」

「・・・・・・・・・・昔みたいに山を消し飛ばすなよ？」

「善処する。あれは仕方がないだろ」

「……まあ、昔にちょっと……ね。俺も若かったと言うかなんと言うか……。」

「それより柳韻。てめえに聞きたいことがある」

「なんだ？そんなに改まって」

「お前の娘、束の事だ」

ピクツと眉が動いたのがわかった。

柳韻は真剣な表情で目を閉じると何かを考えるような仕草をする。

持っていた真剣も床に置いて腕を組むと言いつらそうに口を開く。

「……束は生まれた時から剣の才能が無かった。代わりにあり得ない頭脳を持って生まれた」

「別に珍しい事じゃないだろ。篠ノ之家も、俺達織斑家にも才能が無い者が生まれるのは不思議じゃない」

「わかっている。だが叔父上達がまだ幼い束を……」

「……あんの腐れジジイ共……しぶとく生きてる上に幼い子供に何をしてやがんだ……」

痛くなる頭を押さえながら千冬に抱きつく束を見る。

織斑家同様、篠ノ之家もまた昔から存在する由緒ある家系。

最初は神社の巫女としての家系だが、いつからか“篠ノ之流古武術”を編み出した時からそれは変わり、武術家として変わった。

織斑家と篠ノ之家は犬猿の仲だったが、俺の親父と柳韻の父親、篠ノ之総蔵しののそそうげんの代から仲良くなった。

まあ反対するものもいたが、織斑家、四季組の幹部に舎弟はみな賛成はしたし、篠ノ之家にも反対するものは少なかったからいい関係が築けた。

だが少なからず、反対するものがある。

それは篠ノ之総蔵、師匠の第二人。こいつらが頭が固い馬鹿。総蔵師匠は才能など関係なく誰でも愛し、愛されるが第二人は才能があるものしか認めず、俺達四季組を毛嫌いしている。

実際に俺が総蔵師匠にお世話になる際に何かと嫌がらせをされたことがあった。

まあ、お礼にボコボコにして病院送りにしたけどな！！

「・・・で。たぶんだが束を罵倒したんだろ。落ちこぼれが！ってな」

「ああ・・・正直、お二人は気に入らないんだ。束を落ちこぼれ扱いし、門下生にも手を出したりと。父上も手は尽くしてるけどね・・・」

「よし。殺そう」

「待て！話がこじれるからやめろ！」

自然とつり上がる口を抑えずに立ち上がると柳韻が必死に止める。
あの馬鹿二人・・・病院送りじゃなくて黄泉送りにしてやろう。そ
うしよう。そして後悔して死ね。

バタバタと暴れているとふと、凄まじい気を感じ、柳韻の真剣、つ
まりは日本刀を構える。

「ほっほ。相変わらず勘がいいの」

「っ！せらあっ！」

ガッキイイイン！！

「そして変わらないその鋭さ・・・久しいな」

「・・・あんたか師匠・・・脅かすなよ」

「ほっほ！ジジイの戯れじゃ。気にするでない春樹よ」

「へいへい」

後ろから声がしたため、抜刀して斬りかかると髭を生やしたジジイが木刀で防いでいた。

そのジジイこそ俺の剣の師匠、篠ノ之総蔵。俺が知る最強の剣士。

総蔵師匠は髭を撫でながら木刀を下ろすと俺もまた、日本刀を仕舞って柳韻に渡した。

「・・・弱くなったの。昔はもっと気迫も覇気もあったのに・・・」

「

「仕方ないだろ。鍛えてなかったから衰えるのは当たり前だジジイ」

「ほっほ！ジジイと呼ばれるのも久しぶりよの！・・・して、春樹よ。久しくここに來たが何の用かの？」

「柳韻にも話したが・・・」

かいつまんで説明

「・・・むう・・・束の事が・・・」

「ああ。あそこまで歪んだ子は世界を回っても見なかった。だからこそ気になってな」

簡単に説明をすると役割分担をすることにした。

まずは束が歪んだ原因、ジジイの弟二人を抹殺。息子も追放。

あの二人、俺らより弱いから追い出すのは簡単にできるからな。

「で。束は俺と千冬に一夏が徐々に接して心を開かせる」

「・・・すまんの。我ら篠ノ之家の問題なの・・・」

「いって。親父ん時に世話になったからな。それに子供はあんなに歪んじやいけない、笑顔でいなきゃな」

「春樹・・・すまん」

「だから謝るな柳韻。俺が好きにやるだけだから。な?」

俯くジジイと柳韻にそう言つと四人がこちらに歩いてきた。

「ん?どうした?」

「えつと・・・父さん、お願いがあるんだけど・・・」

「?」

千冬は言いづらそうにする。

あーとかうーとか唸りながらせわしなく目を動かすとチラチラと竹刀と俺の顔を見る。

「・・・」
「・・・」
「・・・」
「剣道を習いたいんだ」

「いぞ」

「だから・・・え?い、いいの?」

「おう。千冬がやりたいならやればいいよ。俺は止めたりはしない」

束、病みモード。

ハイライトの消えた虚ろな目でぶつぶつと俺を睨みながら呪詛を唱える。

ジジイと柳韻、篝ちゃんに千冬、一夏は怯えているようで距離を取っていた。

・・・おいジジイに柳韻。てめえら自分の子に怯えんなよ。

「・・・むう・・・めんどくさいな」

「なに？タバネサンとヤルつもり？」

「ハナからそのつもりだクソガキ。必ずお前を認めさせてやるよ」

「くすクス・・・オモしろイネ・・・」

前途多難。さらに面倒事が増えたな・・・。
いい加減に四季組に戻ろうか迷うこの頃。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十二歳。

織斑一夏、三歳。

千冬は剣道をすることになった。まる。

親父、殴り込む。(後書き)

んー、まあ篠ノ之家のあれは適當。

柳韻は出てるけどその親父は出てないから勝手に出した。

ちなみに春樹、本気ではありません。全盛期には日本列島、消し飛ばせますwwww

千冬は篠ノ之道場に仲間入り。束のヤンデレ具合はさらに加速。

ハロウィン特別企画（前書き）

ちなみにこれ、10/24に予約してありますWWW

苦情は受けないよ？少し未来の事なんでネタバレあるよ！

ハロウィン特別企画

本日は晴天なり。

今日は十月三十一日。ハロウィンである。

そんな行事に天気がいい日でパパ・・・親父は嬉しいです。

「・・・よし。できたな」

現在、二児の親父である俺は家にてお菓子作りに励んでいる。
だって・・・（性的な）悪戯されたくないもん・・・。

千冬は珍しくIS学園から帰り、束のバカも篠ノ之家・・・ではなく、家に来て何かをしている。
というか仮装。

「・・・・・・・・姐さん来なきやいいけど・・・マジ、怖い」

以前にハロウィンに姐さんにトリックオアトリートしたらお菓子な
いって言って・・・ガタガタガタガタ。

悪戯しようとしたらされた・・・しかも（性的な）悪戯を。
貞操が危うく失う上にハロウィンにトラウマができたよ・・・。

「時間、かな？お菓子は大量に用意したから大丈夫なは（ピンポーン！）お。さっそく来たか」

クッキーやらマフィンを袋に詰めて纏め終わるとインターホンが鳴らされた。

失敗作のポッキー擬きをかじりながら家のドアを開けると・・・。

「トリックオアトリート！（お菓子くれなきゃ悪戯するぞ！）」「

「おー。一夏に箒ちゃんか・・・なにそれ？」

「俺は狼男！」

「わ、私は魔女っ子です・・・」

まず現れたのは息子の一夏と居候する箒ちゃん。どうやら離れの茶室で着替えたようだ。

一夏は銀色の狼男の仮装、箒ちゃんは黒い魔女っ子の仮装をしていた。

一夏は満面の笑顔で手を出しながらお菓子をねだり、箒ちゃんは恥ずかしそうにチラチラと俺を見ていた。

「あれ？父さんなに食べてるの？ポッキー？」

「あ？ああ、失敗作だよ。勿体ないから食べてるだけ・・・ほれ。
一夏はマフィン、篝ちゃんはクッキーな」

「ちえ〜。悪戯してからお菓子貰おうと思ったのにな〜」

「殴るぞ」

「すみませんでした軍曹！サー！」

につこり笑いながら一夏の頭をホルドするとピシッと敬礼する
一夏。

逆に篝ちゃんはクッキーを食べて嬉しそうに笑っている。

「ほれ。他に行くなら行く、行かないならリビングに南瓜の料理と
かあるが？」

「食らうー！」

「あ、待て一夏！」

一夏はそれを聞くと真っ先にリビングへと消え、篝ちゃんもまた一
夏を追いかけた。

・・・ううむ・・・一夏は飯の事しか頭にないのか・・・篝ちゃん、
親父は応援するから恋を宥らせるんだぞ。

「ポッキー擬き無くなったな・・・補充補充」

リビングに行くとな案の定、一夏はパンプキンケーキをムシヤムシヤ食ってた。

箒ちゃんはクッキー食べながらたまにパンプキンケーキを食べて頂垂れてるがどうしたんだ？

あれ？まずかったか？味はいいはずなんだが……。

「（うう……美味しい……春樹さん、私より料理上手……はあ……こんなじゃ春樹さんに嫌われるなあ……）」

訂正。篠ノ之箒は少年ではなく、その父親に恋をしているようだ。本人は気付かないと二重苦な乙女であった。

「あ、父さん！これ旨いね！」

「？旨いならいいが……」

よかった。別にまずいってわけじゃないようだ。

一夏は口の周りをクリームだらけにして食べまくっていた。

……？箒ちゃんは少し残念そうな表情で俺を見ていたが。

「ん？また来客か……二人はそこにいろよ」

「わかったー！うまー！」

「あ、はい」

ポッキー擬きを新たに口にくわえるといくつかの袋を持って玄関へ。
ガチャリとドアを開ける。

「トリックオアトリート！（お菓子くれなきゃ悪戯するぞ！）」

「トリックオアトリートです春樹さん」

「と、トリックオアトリート・・・」

「・・・・・・・・あれ？お前らロシアに派遣されてたんじゃ？姐さんはどうした？」

「お姉様ならこっちに来てるよ。ハロウィンだから旦那様に会いに行くぞー！って」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハロウィン（悪夢）再来ー！」

やってきたのは更識姉妹、布仏姉妹。

更識家十七代目候補の楯無、その妹の簪、布仏姉妹、姉の虚、その妹の本音。この四人が家に来た。

たしか四人は姐さんと一緒にロシアにて修行していたはずなのに来たということとはトラウマ発生。

また（性的な）悪戯されるのか俺は……。親父もいないから今度こそ喰われるな。

「それよりトリックオアトリート。お菓子頂戴？無かったらお兄さんでもいいよ？」

「楯無なし。南瓜の皮をかじってる」

「わーわー！うそうそ！冗談だから許してー！」

「ったく……。姐さんに似なくていいだろ楯無。俺、心労で死にそうだわ」

「だ、大丈夫？」

「おお簪……。お前は千冬に次ぐ癒しだ……」

楯無と同じ仮装をする簪を抱き締めるとあわわわと簪は真っ赤になつて慌てる。

そんな簪を愛でながら空気になりかけている布仏姉妹にクッキーを渡した。

「おー、はつきーはお菓子も完璧〜。あむ。おいし〜！」

「ありがとうございます春樹さん。いただきます」

「え〜！私は私は〜？」

「お前はマフィンな。少し南瓜を混ぜたから甘い気はするが・・・ほら。簪も」

簪を愛でるのをやめると二人にマフィンの入った袋を渡す。

「お〜。さすが・・・美味しいね。お姉様が喜ぶわけだよ」

「あ、ありがとう春樹兄さん・・・」

「ではお嬢様。前当主様がお待ちですので行きましょう」

「ん？リビングにケーキあるんだがいらないのか？」

「ケーキ！？食べ・・・ぐえっ」

虚が姐さんに呼ばれてると言うので退散するらしい。

ただでさえ少ない自由時間を無理矢理使って来てるようで名残惜しそうに帰ろうとする。

ケーキ。と聞くと楯無と本音が家に入ろうとするが虚に首根っこを捕まれて阻止される。

女の子にあるまじき声を出す二人は虚に引き摺られていった。

追記すると更識姉妹の仮装は本人曰く、精霊の姉妹らしいがよくわからん。

本音は裾の部分が異様に長い白いシーツのようなものでおぼけ。虚はいかにも真面目そうな魔女のような・・・なんで箸ちゃんとかぶる？

「あー、はつきー！ケーキ！ケーキー！」

「では春樹さん。私達はこれにて・・・」

「おう。暗くなってきたから気を付けてな」

「お、お兄さん！ケーキ取っとい・・・ぐえっ」

「また作ってやるから。姐さんに来るなって言っというて」

「は、はい。ではまた、春樹兄さん！」

「うーい」

虚に引き摺られる楯無と本音、その後を簪が追い掛けるのを見るとパタリとドアを閉めた。

ポケットから煙草を取り出して口に（ピンポーン！）・・・タイミング悪っ。

「はい」

「トリックオアトリック？」

「・・・・・・・・」

「あ、痛い！痛いよはーくん！お嫁さんの束さんを蹴らないで！」

インターホンが鳴ったため、出てみるとエロい格好をしたウサ耳、束が現れた。

取り敢えず蹴つといた。

「トリックオアトリックって悪戯しかないだろ。あん？俺に何をするつもりなんだゴラァ」

「もちろん！（性的な）悪戯だよ！あいたっ」

「そうかそうか。お前にはからしと練りわさびを混ぜたクッキーをやるっ・・・大丈夫。クッキーに塗るだけだからすぐにできる」

「痛い痛い！ちーちゃん助けてー！」

ゲシゲシと束を蹴っていると後ろから千冬が恥ずかしそうに出てきて・・・鼻から愛が流れた。

千冬の格好（仮装）は猫耳付きのミニスカワンピース＋ニーソとかなり際どい仮装コスプレをしていた。

娘LOVEな親父には刺激が強すぎる。

「ほらちーちゃん！はーくんにあの言葉を言って！」

「た、束！やめてくれ！もう耐えられん！父さんなんか鼻血を垂らしまくっているだろう！」

「はいはいちーちゃん・・・これ見せてもいいの？」

「！！」

いそいそと鼻血を拭きながら鼻にティッシュを詰めていると束は何かを千冬に見せていた。

束はすんごい悪い顔をし、千冬は真っ赤な顔のままもじもじしだした。

・・・やめて千冬。出血多量で死ぬから。

「と、父さん！」

「な、なんだ千冬」

「わ、私・・・私に悪戯をして？」

ブチッ！

「・・・ちよっと泳いでくる。お土産に鮫かなんかを取ってこよう」

「え？はーくん！？何を・・・」

「リビングに一夏と篝ちゃんがいるから久々に声をかけとけよ」

「父さん！え、まつ、ええ！？」

脇目も振らずに海に向かって駆け抜けた。

ウイイイイイハアアアアア！！

じゅぽーん…

「てなわけ。疲れたから寝たらそんな夢を見たんだが？ちなみに鮫と鯨を殴り飛ばしたのは覚えてるぞ」

「さっすがはーくん！東さんのお嫁さん！」

「婿だ婿。俺は男だ。決して幻の“男の娘”ではない」

リビングにて千冬、東、一夏、篝ちゃん、で南瓜の料理を食べながら話していた。

まあ、夢は楯無達が来る前辺り。ポッキーを取りに来たらうとうととして寝てしまったのだ。

だって・・・あの四人には姐さんを通して送ったもん。ケーキにクッキー、マフィンをね。

「篝ちゃん元気だった？ごめんね、お姉ちゃんが一緒にいられなくて」

「ううん。春樹さんがいたから寂しくなかったよ・・・でもお姉ち

やんがいないのは寂しかったな……」

「篝ちゃ

ん！ー！ごめんよ

「！！」

束はガバツとIS学園の制服のまま、魔女っ子の仮装をする篝ちゃんに抱きついた。

篝ちゃんは束の大きな胸に埋めれるとびっくりするがすぐにこつと笑って束を抱き返した。

そんな二人を見ながら俺はポツキーをかじると千冬と一夏にそのポツキーを渡す。

千冬も一夏とは久しぶりに会うから一夏は千冬に色々話してる。千冬は微笑みながらこくこくと頭を振りながら一夏の話聞く。

149

「でね！父さんはその先生と話し合っつていじめを解決したんだ！千冬姉は学園、どうだった？」

「……うむ。女子に“お姉様”だなんて言われて……はあ……」

「……お前、またか？またなのか千冬？」

どつちから千冬、IS学園でも才能^{チート}を発揮してるようだ。

「はーくんはーくん！記念撮影しよ！」

「ん？いいが・・・カメラは？」

「東さんにお任せあれ！ぽちっとな！」

ウィーンと床が開くと脚立付きのカメラが上がってきた。

「・・・後で直せ。いいな？」

「らじゃー！・・・チツ、はーくんの盗撮ができないな」

「なんか言ったか？」

「なんでも？ほらほらいつくんもちーちゃんも入って入って！」

東に無理矢理押されると真ん中に一夏と篝ちゃん、その上に俺、東は俺に抱きつき、千冬はピタツと寄り添うように立った。
これが構図・・・東、胸を当てるな。

「はい、チーズ！」

「早い！東、早いぞ！」

パシャツと音がするとフラッシュが叩かれ、その構図が撮られた。

そこには心から笑う四人とひきつった顔をした俺が写っていた。
ハロウィン・・・トラウマだけどいいもんだな・・・。

ハロウィン特別企画（後書き）

さて・・・これが実現できるかできないかWWW

今度はクリスマスかな？やるかわからんけど。

娘、知る。(前書き)

親父 春樹視点

娘 千冬視点

息子 一夏視点

というわけで今回は千冬視点！・・・なのに千冬が変態化した。なぜだ！？

あ、教えてもらったんですが週間アクセスが一位、月間アクセスが二位だそーですね。

・・・マジか？日間アクセスも一時一位だったみたいだし・・・パネエ・・・。

娘、知る。

今日の天気は晴れ。

雲もあまりなく、日光がさんさんと穏やかに照る、そんな日。今日は祝日で休み。父さんと一夏と家におり、遊びに行く予定だったが……。

「ううゝ……げぼっげぼっ！」

「38、6……風邪ひいたの？」

父さん、風邪ひいたようだ。

いくらバグキヤラでも風邪はひくんだねって実感したよ。

「ち、千冬貴様……俺を化け物扱いに……げぼっ、したな……」
「？」

「さ、さあ？ほら。薬を飲んで」

訂正。バグキヤラは風邪ひいてもバグキヤラ。

私はベッドの上で死んでいる父さんに薬を飲ませると頭に冷えピタを新しく張った。

あゝあゝと情けない声を出す父さんは普段の堂々とした態度とは真反対なので少し新鮮だ。

「ちふゆねえ、おとうさんだいじょうぶ？」

「・・・微妙だな。まさか父さんが風邪ひくとは思わなかったからどうなるかわからないな。今日は出掛けるのは無理そうだ」

「えー！ひさしぶりにキャッチボールしたかったのに！」

「あゝ、すまん一夏。埋め合わせはするから部屋カリビングで大入しく・・・げほっ、しとけ。風邪移したら大変げほっだからな」

そう言うと父さんはボスツと布団にくるまると目を閉じた。

「・・・なんか色っぽい・・・げふんげふん！」

「ちふゆねえ、かおがきもちわるいよ」

「・・・い ち か？」

「ごめんなさいちふゆねえ!!」

にこっと笑いかけると一夏はなぜか頭を下げ謝る。なぜ？

「（・・・無意識だとしたら姐さん以上の恐怖になりそうだな・・・頭痛い）」

「じゃあ父さん、私と一夏はリビングにいるから何かあったら呼んでね？」

「んー」

父さんはのろのろと布団から手を出すと力無く手を振った。

本当に珍しい。父さんはほとんど風邪や病気にかかったことないって言ってたのに。

それにたぶん風邪は前の季節外れの台風の時かな？びしょ濡れで帰ってきて上半身裸でうるついていたから風邪になるのは仕方ない気がする。

シャワー浴びても意味ないよ父さん。

「ちふゆねえ、いまからなににする？おとうさんはうごけないみたいだしね」

「二人で出掛けるのは駄目って言われてるし・・・私は父さんの看病するつもりだ」

「ならおれも！おれもかんびょうする！」

・・・迷うな。父さんをノックアウトした風邪だ。

一夏に移ったらとんでもないことになりそうな気がするな……うん……。

取り敢えず一夏には雑炊か何かを作るのを手伝ってもらおう。私はまだご飯を炊くこととお湯を沸かすしかできないし。

……今情けないと言ったやつ……斬り殺すぞ。

「ちふゆねえ？」

「む。なら一夏には雑炊を作ってもらおうかな？私は作れない……し……」

自分で言っただけなんだが地味に落ち込む。

男である父さんは料理が得意で女である私は苦手で一夏は上達している途中……なぜか腹が立ってきた。

なぜ神は残酷なのだ！！料理もだがなぜ私はむ、胸の成長が遅い！？束は私達の中では巨乳と崇められるほどでかいのになぜっ！！

答える神ッ！！貴様は私が嫌いかあああああつ！！

……こほん。失礼、取り乱しました。

毎日朝に牛乳は飲むのだが束のようにたわわにはならん。

なぜだ。束は胸がでかくなる魔法でも使っているのか？

千冬は同年代では大きい部類に入ります。

束が異常なだけです。

「わかったー！……でもちふゆねえ、りょうりできないんじゃ……」

「ぐはっ！」

一夏の何気ない一言により、私は胸を押さえて蹲った。

……父さんが言っていた無垢な子供のきつい、かつ何気ない一言こそ一番胸に突き刺さる。これ、本当のようだ。

だって一夏……首を捻ってなんで？みたいな顔してるもん。

「と、とにかく！一夏は雑炊を作ってくれ！いいな！？」

「いえっさー！」

わーい！と言わんばかりに一夏は走りながら台所に行き、手を洗う。それから鍋やら冷蔵庫から冷やご飯、卵、ネギを取り出すとまな板の上に置いた。

……はっ！？しまった！一夏はまだ一人で火は使ってはいけなかった！

私は慌てて台所に行くと一夏と卵雑炊を作ることにした。私はまだギリギリで火を使うことは許されているからな。

・・・だけど父さんがクイズミリ ネアの一千万の問題みたいに私に火を使わせるのを悩んでいたのを思い出すと不安がある。

「（・・・以前に使って火事になりかけたのに気付けよ。どんだけ慌てたと思ってんだバカヤロー）」

「あれ？おとうさんのこえがきこえたよ？」

「・・・父さんは寝ているんだぞ？声が聞こえるはずがないだろう」

一夏の将来が心配になってきた。

何はともあれ、雑炊ができたので一夏と父さんの部屋に雑炊を持っていく。

父さんの部屋はマンションの一室の中で一番大きく、そこにはキングサイズのベッドがあったりする。

・・・最初に聞いたら「寝やすいだろ」って言ってたが・・・でかいぞ父さん。

「おとうさんおとうさんぞつすいつくったけどたべれる？」

「んー、もらじー」

のそのそと起き上がる父さんは何度も言うが普段とは違う様子なので新鮮すぎる。

なんかこう・・・保護欲をくすぐられるような・・・。

“千冬は母性愛に目覚めた！”

「まむまむ・・・」

「おいしい？」

「まずくはないぞ」

「・・・そこは美味しいって言いなよ父さん・・・」

落ち着け！落ち着くんだ私の右手よ！

父さんの食べる姿は小動物のそれに似ているため、撫でたくて右手がうずうずしていた。

なんとか抑えて一夏が雑炊を父さんに食べさせるとまた布団にくるまり、爆睡し始めた。

「・・・めずらしいねちふゆねえ。おとうさんが二ヶ月までよわって
るのってはじめじゃないかな？」

「確かに・・・だが今日はどこで寝ようか？」

一応、私達の部屋にもベッドはあるが、大半は一夏と父さんのベッドに潜り込んで寝ている。

だって・・・いい匂いがするもん。

・・・この発言だけだったら私は変態だな。

いい匂いがするのもそうだが、父さんと寝ていると安心感があるし、朝起きたらストレスとかゼロって素晴らしいオプション付きなのだ。

だから私は父さんと寝ている！ファザコンとか言われても構わん！

「ねえねえちふゆねえ、いまからなにかしない？おとうさんねちゃったし」

「なら人生ゲームしよう！東さんが持ってきたやつ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・待て。今なんかいたぞ」

声が出た方を見ると東と妹の筈がいつの間にか部屋に侵入していた。

・・・鍵は？

「束さんが破った！オートロックなんざ束さんの前では無意味無意味！」

「……一夏、警察に通報しろ」

「らじやー！」

「わー！待って待って！束さんと篝ちゃんは呼ばれて来たんだよ！……そいつから」

「……は？父さんが二人を呼んだのか？」

「遊ばないか？みたいに言われたから来たんだぜ！ぶいぶい」

「いえーい！とピースをする束、おどおどしながら束を止めようとする篝……」

どっちが姉かわからん。

それは兎も角。不法侵入した束を篠ノ之道場の柳韻さんから借りた竹刀で頭を叩いておいた。

痛み悶える束を放置して父さんの脇にある体温計を抜いて見ている。

「……37.8？え？早くね？まだ二時間くらいしか経ってないのに下がるの早くない？」

「・・・ちーちゃんちーちゃん！東さん達とゲームしよう！」

「だ、だが私は父さんを看病しなければならぬし・・・」

「・・・ちつ、イラつくねこいつ。ホルマリン漬けにして解剖してやるつか？」

「ん？何か言ったか束？」

「なんでもないよ。さあさあちーちゃん！遊ぼうよー！」

「しかしだな・・・ん？父さん？」

「行ってこい。俺は大丈夫だから、な？」

「・・・んー、わかった。何かあったら呼んでね？」

「ああ・・・束に篝ちゃん、悪いな。呼んだのに風邪ひいたわ。気にせずに遊んでいってくれ」

「あ、はい！おじゃましますはるきさん！」

「・・・」

「ほらおねえちゃんもあいさつして！」

「・・・ちつ、お邪魔するよ。できたらずっと寝込んで私とちーちゃんの邪魔はしないでよ」

・・・父さん、さすがに怒ってもいいよね？止められてるけどそこまでされたら我慢ならない。

東、父さんは私と一夏の父親であり、家族なんだ。侮辱されるのは許せないんだよ！

父さんもなんで反論したりしないんだ？

東の事は柳韻さんと総蔵師匠と話し合って何とかするみたいだし・・・。

「ほつきちゃん！こっちこっち！おとうさんからかりたゲームがいっぱいあるから！」

「う、うん」

「じゃあ私達は行くよ。何かあったら本当に呼んでよ？」

「うー」

父さんはまたひらひらと手を振って眠りについた・・・。

「・・・なんだこれは・・・」

「おーすげー！アニメのDVDがいつぱいだー！」

「・・・すげー」

「これ、あいつの？アニメとか見るんだ」

三十分後、趣旨はがらっと変わり、なぜか家の探検をすることになった。

父さんのお宝部屋に入るとアニメや特撮のDVDやらフィギュアやらなんやらとごちゃごちゃしていた。

・・・あ。ガンダムがあるな。

他にもゲームやら色々あったのだが・・・さすがにエロ本はないか。

「ちっ！エロ本があれば脅せたのに・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いいな」

ポツリと呟く。

エロ本を盾に普段はしてくれない“ちゅー”とかを要求するのもありだな。うん。

・・・さてエロ本を探そうか。

二十分後

「・・・ないな」

「おー！ガンダムのプレミアのついたやつがあった！スターウォーズとかもある！」

「う、わ・・・“かたなめいかん”ってのもあった」

「すごいねこれ・・・どれだけ金をかけたんだろ？」

結果、エロ本はなかったようだ。

その代わりに、見たことない図鑑とか漫画とかが大量に見つかった。

それになにこれ？ “きんぴらごぼつ”の歴史”って誰が読むのだろうか？

・・・ほうほう。きんぴらごぼつって・・・へー・・・。ここにいたようだ。

「ちーちゃんちーちゃん！ここ、ここ！なんか嚴重だよ！」

「ん？」

束を見ると本棚の裏に鎖と南京錠が掛けられた細長い木の箱が見えた。

・・・まさか・・・エロ本か！？

ならば開けなければ！えっと・・・まずは南京錠を破壊「なにしているんだてめーら」「し・・・て・・・？」

「げっ！おとうさん！？」

「物音がするから見に来てみれば・・・なにしてた？あん？」

「あ、いやぁ・・・そのお・・・」

ま、まずい！父さんにこの部屋には入るなって言われてるから・・・死んだ。

ガツン！ゴツン！

「~~~~~！！」

「入るなって言ったよな？入りたければ許可を取れとも言ったよな？」

父さんに拳骨をもらい、一夏と私は頭を押さえる。

父さんは右手を握り拳にしたまま私と一夏を睨むように見下ろす。

「……はあ……なんで入ったのかはわかるが……あまり荒らすなよ。俺の刀まで持ち出しやがって……」

「……かたな、ですか？」

「ん？箒ちゃん、気になるのか？」

「はい！ちちうえのかたなもですがわたしはかたなをみるのが好きですから！」

「……ここだけは柳韻の遺伝か……」

父さんは箒の頭を撫でながら南京錠と鎖の掛かった木の箱を触り、鍵を外した。

中から出てきたのは黒いボロ布に覆われた棒状の物体。

布を剥ぐと出てきたのは黒い鞘。刀の鞘だった。

「これは俺が親父と爺さんから引き継いだ俺の刀……“緋桜”だ」

「……あかい、かたな……」

父さんがそれを抜くと現れたのは赤い刀身。血のように鮮やかで、桜のように綺麗な色をしていた。

……自然と目を奪われる美しさがある……なんで父さんは大業物とも言える刀を？」

「あん？親父が爺さんからもらったものを俺がもらったただけだ。ちなみに俺は春樹だから“春”の刀をもらい受けた」

……というか風邪治ったのか？いくらなんでも早い気が……。

「他にもあつてな。夏の“蒼燕”、秋の“紅葉”、そして冬の……“雪片”。それが織斑家、四季組の伝統ある刀だ」

父さんはそう言うと緋桜、だったか？刀を納めると嚴重に仕舞い、本棚も戻した。

……雪片……なんか惹かれる感があるな。

「あ、罰として今日はお前らの嫌いなピーマン尽くしだ」

「え〜〜!!」

「黙れ。部屋に入った罰だと言ってるだろうが」

そう言った父さんはすごいいい笑顔をしていた。

・・・いじめっ子の顔だ・・・。

織斑春樹、三十四歳。

織斑千冬、十二歳。

織斑一夏、三歳。

束達が帰った後、夕食はピーマンだけだった。まる。

娘、知る。(後書き)

千冬が変態化。というか重度のファザコンになったな。

どうやって治していくべきか……。

さて。今回は緋桜って刀が出ました。

織斑家、四季組には四本の刀があり、冬はもうフラグです。がっちりフラグでっせ。

おまけ

「というか父さん？なんで風邪治るのが早いの？」

「気合いだ」

「……………」

「だけど鈍ったなあ……昔は一時間くらいで治ったのにな」

このバグキャラめ。と千冬は思ったらしい。

父さんの知りたくない新しい一面を知った日だった。
（千冬の日記
より抜粋）

親父、近づく。(前書き)

八十万アクセス突破。

すげー。ハロウィンの日のアクセスなんか十三万アクセス行ってたし。

最近春樹のISをどうするか迷ってますね。

・・・いらぬかWWW

親父、近づく。

本日は晴天なり。

夏が近付いているのに今日は過ごしやすい環境である。
そんな中、俺は……。

「わーい！ゆうえんちー！」

「おおきい……」

「……人が多いな……」

「ちーちゃん！ちーちゃん！あれに乗ろうあれ！」

「少しは静かにしやがれ」

遊園地に来ている。

千冬&束の卒業&中学入学祝いに無理矢理休みをもらって来ているわけである。

いやー、早いものだね。千冬と一夏を引き取ってから三年近くか・
・長いようで短かったな。

……あ。ちなみに時期が飛んだというツツコミはなしだぜ？別に報告する事はないからな。

あえて言うならば千冬を鍛え（いじめ）たり、千冬を鍛え（いじめ）たり、一夏が料理の準鉄人になったり、篝ちゃんの師匠になったり、千冬を鍛え（いじめ）たりしたくらいだな。

「（・・・ああ・・・私は生きてるんだな・・・）」

「・・・ちーちゃん、ドンマイだよ。後で束さんが慰めてあげるから」

「・・・あー、いや、すまん。つい・・・」

今まで弟子を持ったことも自分の子供に教えたりする事がなかったから嬉しくてつい・・・すまん千冬。

後は束との関係くらいかな？

以前に束と篝ちゃんを家に呼んだ時にお宝部屋を見たら？なんか気になるものがあったって好感度が少しだけ上がったのだ。

呼び方は“それ”から“お前”に変わり、ちよくちよく遊びに来ては荒らしまくってる。

ちなみにお前って言うたんびに拳骨で指導をしているが。

「おとうさん！あれにのりたい！」

「・・・私は待つてるから行ってらっしゃい」

「まあまあ、楽しもつぜ」

ガシッ、ズルズル・・・

「い、嫌！あれだけは嫌なんだ父さん！」

「~~~~」

「まあまあちーちゃん・・・諦めるのも肝心だよ？」

「い、嫌だあああああつ！！！」

嫌がる千冬の手を引いて引き摺りながら遊園地の定番・・・ジエツトコースターに乗ることにした。

むっふっふっふ・・・いい声で鳴けよ？

しがみつく篝ちゃんの中を擦り、マジ泣きする千冬の頭を撫でた。

「すまんすまん。次はあれな？あれなら怖くないだろ？」

「……父さんのいじわる……」

「悪い悪い」

まったく悪びれずに千冬の頭を乱暴に撫でた。

千冬はムスツとしていたが仕方がないなみたいに笑うと座っていたベンチから立ち上がった。

「……なんか見られてるな……そんなに気になるかバカヤロ！」

「なあ、あの子可愛くね？」

「むしろ俺は紫の子の方がいいな」

「ねえねえ！あの人カッコよくない！？モデルさんみたいだよ！」

みたいな会話は春樹達には聞こえなかった。

というか聞いていたら間違はなくその遊園地は血でまみれた地獄と
なってしまうだろう。

だって……親バカだもの。みつを。

「ねえ」

「ん？なんだ？」

「また本、貸してよ」

「いいぞ……ってかもう読んだのか？タウンページ並みに分厚いはずだが？」

「……学校、面白くないもん」

そう言った東は少し拗ねた様な顔をしてそっぽを向いた。
うーん……まだ心を完全に開いてくれないな……。

千冬も東と同じ中学校に行かせたがやはり馴染めない様子。
あそこまで早熟してる上に世界が羨むような頭脳を持つから普通の人間では付き合えないだろう。

……心配だ。

「やつほー！」

「い、いちか！まってよー！」

「走ると転けるぞー！……で？中学校はどうだ二人共。馴染んだか？」

「まあ、私は・・・うん。慣れた・・・よ?」

「なんで疑問形なんだよ」

「ちーちゃん、皆に気に入られてちやほやされてるもんねー」

「た、束!」

「なぬ・・・?まさか千冬、彼氏か?彼氏ができたのか?ん?言え。早く吐け。そいつをコンクリート漬けにして東京湾に沈めてやるから」

「ち、違う!違うよ父さん!(私が好きなのは父さんだし・・・何を言ってるんだ私はあああああつ!!)」

「むしろ鮫の餌にしたら?ちーちゃんに手を出す奴は見敵サーチアンドデストロイ必殺でいいんじゃない?」

「・・・束」

ガシッ!

俺と束は同時にガシリと握手をした。

ここに千冬を守る会の設立した!

「これ、ちーちゃんに好意を寄せてるやつ、厭らしい目で見ると
のリストだよ」

「ぶっ血killer」

「いや、でも私達は親子だし・・・」

中学生にはありえない大きさの胸から紙の束を出す束、その紙の束をイイ笑顔で読む春樹、なんか自分の世界に入った千冬・・・。遊園地の一角がかなりのカオスになっていた。

そこに新たな火種が・・・。

「ねえ坊や達、おじさん達とイイコトしないかい？」

「なあああに息子に手を出してんじゃゴラアアアアアッ!!」

「けっぶ!?!」

いかにも誘拐するぜ!と言わんばかりに一夏と篝ちゃんに声をかける変態をドロップキックで蹴り飛ばした。

・・・さて。現在、春樹達のいる場所はメリーゴーランドの上である。

そこに春樹の脚力で蹴り飛ばされた変態はどうなるでしょう?

「ぶるああああああ・・・っ」

模擬回答。地平線の彼方まで飛ぶ。
遠心力も僅かに加わり、変態は星となった……。

参考。春樹のキック力はダンプカーが時速65?でぶつかる時に生じる力と同じである。

無論、手加減はしてあるが……。

南無。

「この如月ってあのクソガキか？」

「うん。入学した時に馴れ馴れしく声をかけられたよ……目が氣持ち悪かった」

「……うむ。慰めてやろう。我輩に抱きつきたまえ」

「断る。ちーちゃんの胸に埋まる方が……ちーちゃんの愛が痛い
いゝゝ!!」

ギリギリと頭を掴まれる束はバタバタと暴れるがアイアンクローをする千冬は真っ赤になりながら極めていた。

……なんだかんだでいいコンビだよな。二人は。

ちーちゃん痛いゝゝ!とか黙れ!お前の胸に自分で埋まってる!つてやりとりは聞かないフリしてメリーゴーランドの馬に乗る一夏と篝ちゃんを下ろした。

「あの二人は無視して何か行こう。他人のフリを・・・無駄か。俺
顔は千冬に似てるからな・・・」

グルツと周りを見ると目、目、目。すげー見られてるな。

取り敢えず千冬と束の首根っこを掴んでズルズルと引き摺り、一夏
と篝ちゃんとその場から離れた。

・・・え？ナンパ？丁重にお帰り願ったら急に手の骨が砕けていな
くなりましたがなにか？

「うっ……気持ち悪い……」

「……まさか絶叫系のオンパレードとは予想だにしなかったな……ほら千冬。水飲んどけ」

「……ありがとう、父さん」

……はあ。俺は絶叫系のアトラクションは好きだがまさか千冬がここまで苦手とは思わなかったな。
グロッキーになってベンチで死んでる千冬にペットボトルのミネラルウォーターを渡す。

うーん、一夏と束はピンピンしてるが箒ちゃんはギリでアウトか。なんか疲れてるし。

「……大丈夫？なんか悪いな箒ちゃん」

「だ、だいひょうぶでふ……」

「駄目だこりゃ」

ふらふらとする箸ちゃんに呆れた感じに目を向ける。
うむむ……！これから昼食にしようとしたんだが……どうしよ？

「たべるー！」

「食らうー！」

「お前らに聞いた俺が馬鹿だったな。千冬と箸ちゃんはどつする？」

「……お腹も空いたから食べる」

「わ、わたしも」

一夏と束は即決。バイキングを希望。
千冬と箸ちゃんはグロッキーになりながらも空腹を抗議。

……よって飯を食らおう。

「……バイキングに行きたいか」

「おー！」

「お、おー？」

「……いや、箸。真似しなくていいからな」

ノリがよくておじさんは嬉しいよ。

こゝこの味はあああああつー!!

「・・・今のは宇宙からの交信か？カレー好きな料理人の顔が浮かんだんだが・・・」

「・・・頭、大丈夫？」

「んだとゴラア」

バイキング終了のお知らせ。

案の定、食いまくったのは一夏だけ（・・・）だった。

束も暴飲暴食するかと思っただが俺が貸した“遺伝子工学の全て”を読むのに夢中だったからほとんど食べてない。

あんだだけテンション高くせにそれはないわー。と思っただ俺はおかしくないはず。

千冬と箒ちゃんは和風コーナーの料理を手当たり次第食らい尽くしていた。

・・・千冬は兎も角、箒ちゃんは小さい体に入らないような量を食べていたのは気のせいか・・・？

・・・え？俺？珈琲とサンドイッチしか食べてませんが？
だって腹減ってないもん。

なのに我が子達の陰謀により、かなりの料理を食わされた。

おのれ。俺を太らせたのかてめーら。

「絶叫系逝く？今なら胃の中をぶちまけられるぞ」

「い・や・だ！」

「さすがにそれはないよ」

断固拒否ッ！と言わんばかりに首を振る千冬、呆れた目で見る束。ちよつとした冗談だろうがよ……。

絶叫系のアトラクションはパスしてジョズに似たツアー式のアトラクションに搭乗。

……これがまた恐ろしい。本物のライオンとか使って説明してくれるんだが。

どこのサファリパークだコノヤロー！

バンバンとバスを叩くライオンに一同は怯えていたが、俺が一睨みするとあら不思議。全速で逃げた。ふふん。ライオンとバトった事がある俺を嘗めんなよ。実家にもライオン飼ってるんだよ！

……取り敢えず千冬と一夏には黙つとこつ。

あそこは動物の魔窟に加えて変態どもの城だからね。うんうん。

「おとうさんアイスクリーム！アイスクリームたべたい！」

「東さんも〜！」

「勝手に走り回るな！って待てやゴラアアアアツ！！」

「きゃー！」

「キヤー」

「……東、父さんが嫌いじゃなかったのか……？ 篤、私達も行こうか」

「あ、はい」

いくつかアトラクションを回ると一夏と東のテンションがランナーズハイみたいになっていた。

俺はそれを追い掛ける。その後ろを千冬と篤ちゃんが手を繋いで歩く。

……そのせいで周りから微笑ましい、生暖かい視線を向けられるはめになった。

「ぜえ……ぜえ……勘弁しろよ。今の俺はおっさんなんだぞ……」

「……それ、全国のおっさんに喧嘩を売るようなセリフだよね？ 父さんほどおっさんは似合わない気がするぞ」

「経験は取り戻しても体力は無いに等しいんだよ。知ってるだろ？」

千冬を鍛え（いじめ）る際に自分も鍛えてはいるが全盛期にはまだまだ程遠い。

・・・だが一般人よりかは遥かに上だが。

リハビリがてらにジジイと柳韻とバトルをしているが引き分けが多い。

前までは瞬殺できたんだけどね。

「あ、一夏！待て！」

「あ、いいよ父さん。私が捕まえるから休んでて」

「千冬？おい！」

また一夏が走り回り始めたので捕まえようとしたが千冬が手で制して千冬自身が一夏を追い掛ける。

・・・気を使わせちゃったか・・・。

ため息をつくときポスンと隣に誰かが座った。

そちらを見てみると束がアイスクリームを舐めながら座っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・なんか喋れよ。ただ単に黙ってるだけじゃわかんねーぞ」

「・・・なんで私まで呼んだの？」

「・・・悪い。あんなにはしゃいで今更それか？」

「う、うるさいよ！いいから答えてよ」

束は少し顔を赤くして叫ぶが今更感があるから怖くもないな。

「なんでと聞かれてもなあ・・・ただ単にお前を楽しませたいだけだけど？」

「え？」

「お前、たまにだけど“自分は何のために生まれたか？”って考えてるだろ」

「・・・」

「答えのひとつとして今日の遊園地だ。今日の一日を通してどうだった？楽しかっただろ？一夏とはしゃいで楽しかっただろ？ん？」

「それは・・・」

「それでいいんだよ。“自分は何のために生まれたか？”なんて誰だって思う。人生を通してそれを見つけるのが普通なんだよ・・・」

今の子供であるお前が難しく考えなくてもいいんだよ。今はただ楽しめ。お前はまだまだこれからなんだぜ？」

「……………東さんは……………私は……………」

「迷え。悩め。探せ。お前にも俺のように“答え”を見つけれは
ずだよ」

最後にガシガシと頭を撫でると持っていたアイスクリームのコーンを食べ尽くした。

そして丁度、逃げ出した一夏を千冬と篝ちゃんが連れてきた。

……………一夏の頭にタンコブがある……………千冬に殴られたのか。

「待った？」

「いや。お疲れ、一夏は速かっただろ？」

「……………まあね」

一夏を肩に担ぐと千冬と篝ちゃん、そして東と観覧車に乗ることにした。

その途中、東は俺に近付くと少し迷った感じに話しかけてきた。

「……………東さんも見つけれられるかな？」

「望めばな……で。改めてはじめまして“篠ノ之束”。俺の名前は織斑春樹だ」

「……まだ完全に心を許した訳じゃないけど……よろしくね。私は篠ノ之束。あなたに興味が沸いてきたよ」

「はは。いいぜ？簡単に心を許すのは本当に信頼してる相手だけにしな」

一夏を肩車し直すと束と握手する。

観覧車に乗る俺達。束の顔は少し晴れやかになっていた。

織斑春樹、三十五歳。

織斑千冬、十三歳。

織斑一夏、四歳。

少しずつ束と近づき始めた。まる。

親父、近付く。(後書き)

無理矢理すぎる気がするな。

ここにて束の研究者フラグ&IS作成フラグ。遺伝子工学っぽい感じがするもん。

束は少しデレましたがまだまだ先ですよ。ヤンデレ化がゴールです。

次回は時間が飛ぶかも。

親父、穏やか？な一日。(前書き)

あとちよっとで百万アクセス。

IS専用機はマジで悩む。いるかいらんか読者はどちらか……！

とつかIS史上初のネタを使いそうなんだが……。

今回は日常編みたいなの。ISには欠かせないあの方が出ます。

親父、穏やか？な一日。

本日は晴天・・・なり？

まだ暗いからわからないが天気はいいと思う。

現在の時刻は午前五時半。よい子の皆、サラリー戦士の方々は夢の中だろう。

「ふあああゝ・・・ねみい・・・」

「ほら父さん、早く行くよ」

「ういいい・・・」

「おれもねむい・・・」

我らが織斑家は午前五時半に起床、支度をして朝のランニングに出掛ける前である。

千冬が剣道部に入ると鍛えるとスタイル維持の両立で規則正しい生活が強要された。

クソ眠い中、千冬に一夏と一緒に叩き起こされ、ジャージに着替えるのは嫌にイライラする。

実際に一夏はこっくりこっくり船を漕ぎながら隣をゆったりとしたペースで走ってるし。

「あ、おはようございます」

「どうも」

「おはようございます」

「うー、おはようございませぬ」

すれ違うランニングをする人に挨拶をしながら定番の川原を走る。微笑ましそうにおっさんは一夏を見ながら反対側に走っていった。

しばらく走ると後ろから誰かに頭を叩かれた。

「おはよう春樹。相変わらず眠そうだな」

「……俺は夜行性なんだバカヤロー。てめーみたいな鶏じやねーんだよバカヤロー……バカヤロー」

「なぜ三回も言う!? お前、昔は朝型だっただろうが!」

「人は時間が過ぎれば変わるぞ柳韻。実際に煙草を吸わなくなったし、テロリスト相手に暴れることもなくなったし」

「……テロリスト相手に暴れるのはお前くらいだぞ」

「お前も昔はヤクザ相手に無双してたろうが……ふあああ……あぶつ」

欠伸をしながら隣に並んで走る柳韻を見る。
こいつ、毎朝ランニングしてるらしいがよくやるもんだな。俺なん
か親父が死んでからはまったくしてないぞ。

その隣に篝ちゃんがジャージを着て走っているけど。

「で、お前さんはまたやったのか？」

ゴスッ

「は？何の事だ柳韻。俺が何かしたと？」

ゴスッゴスッ

「したたる！また墮としゃがって！お前の体質は底無しか！」
フラグメーカー

ゴスッゴスッゴスッ

「はあ？体質フラグメーカーだあ？親父みたいなリア充じゃねーよバカヤロー！」

ゴスッゴスッゴスッゴスッ

「こいつ……！昔から鈍感は治らないのか!？」

ゴスッゴスッゴスッゴスッゴスッ

「むしろ鋭いぞ俺は。半径4？以内ならスナイパーを見つけれられる

ぜ？それに俺はモテないんだよクソヤロー！」

ゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツ

「「・・・やんのか？」」

ゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツゴスツガスツ！！

「表出るや！ぬっ殺してやんよ！！！」

「上等だ春樹！今度こそ俺が勝つ！！！」

「「篠ノ之流・無手奥義“居抜き”！！」」

ズガアアアアーン！！

「・・・なんでこうなるんだ・・・」

千冬の咳きが静かな朝に響く爆撃音に打ち消されるのだった・・・。

ちなみに一夏と篝ちゃんは川原で石を集めてたり、竹刀を千冬と振ってたりしたそうだった。

時間は飛んで午前六時四十五分。帰宅すると朝飯の用意をする。

今日はスクランブルエッグにウィンナー、ベーコンにサラダに食パンにした。

・・・え？柳韻？俺の完封勝ちですが？

「「「いただきます」「」」

「いただきますーす！」

「・・・またお前か束・・・」

「おお！美味そうだね。さすがはちーちゃんの父親！やるやるー！」

「・・・作ってやるから座ってる」

「わーい！」

遊園地の時から朝飯時に束が乱入してきたりするのはデフォになっていた。

柳韻達の家では食べないらしいがなぜか織斑^{つむぎ}家では食べるのでよく来たりする。

鼻歌を歌う束にも同じメニューを渡すと自分も食事再開。

「あ！やばい！時間が・・・束、早く行くぞ！」

「ああ！待ってよちーちゃんー！」

「車に気を付けるよ」

「行ってきます！」

「じゃあねいつくん！また夜に来るから（……………）！」

「来んな」

現在の時刻、午前七時半。千冬、束、登校時間。

千冬に弁当を渡すと千冬は食パンを口に加えながらバタバタとベタな朝の風景を見せながら束と学校に向かった。

……待て。ナチュラルに束に俺の弁当を取られたんだが……。

俺、飯抜き？

「おとうさんはやくはやく！」

「それよりもお前は大丈夫か？ハンカチは？ティッシュは？弁当は？」

「だいじょうぶだよ！」

束に貸していた“ロボットとは”と“宇宙とはなんたるか”を本棚に仕舞いながら歯を磨き、準備をする。
んー、後十五分か・・・少し急ごう。

・・・ふむふむ。束はまた何冊か本を持っていったみたいだな。
何の本かはわからないが束はよくあんなの読めるな。親父の親友からもらったものを保管しているだけだから俺は読んでないし。

「おーし。行こうか」

「れっつじー！」

午前八時。俺、一夏、登園&出勤。
ママチャリに乗って一夏の幼稚園にGO。一夏は後ろの席にこじんまりと座っている。

これが朝の日常。

一夏を幼稚園の先生に渡すと俺はさっさと仕事に向かう。
たとえ、美弥先生（名前で呼べと言われた）がなんか熱っぽい視線を向けてたとしても。

「はよーいざいます」

「おや。今日は早かったね春樹君」

「はは。一夏が準備が早かったからですよ十蔵さん」

「はっはっは！父親してるね春樹君、私も子供が欲しくなったよ」

「いやいや、子育ても辛いですよ。一夏なんか最初は夜に泣いては疲れましたからね……」

清掃員として働く会社に来ると先輩に当たる轡木十蔵くわぎじゆうぞうさんに挨拶する。

十蔵さんは笑いながら緑色の制服に着替えているが本当に寝不足になるぞ。俺は働いてなかったからよかったものを。

「今日も頑張りましょうか春樹君」

「うす」

午前九時、仕事開始。

今日もいつもと変わらぬビル内部を清掃することになった。

普段も変わらず、ビル内部を清掃したり、備品の補充したりするのが俺達の仕事。

たまにキャリアウーマンのお姉様方に食事に誘われたりするが全て断る。

千冬と一夏と食べるのが一番いいから。

「……春樹君、相変わらずモテるね」

「はい？十蔵さんまでそれを言いますか。俺はモテないですよ」

「（・・・ルックスも性格もいいのに勿体無いね。彼、自分に寄せられる好意にまったく気付いてないようだ）」

「・・・なんすか。俺、なんかしました？」

「春樹君。それを直さないと結婚はできないよ？」

「結婚はしませんから。二人の子供が一人立ちできるようにって、なおかつ余裕があったらしますよ・・・たぶん」

トイレにてトイレトペーパーを投げながら補充すると十蔵さんがため息をついていた。

・・・本当になんかしたか俺？

「（うむ。頑張りたまえよ諸君。おそらくはこの会社の未婚のベテランも新人の女性はみな春樹君を狙っているだろうしね。私は恋が実るのを祈るよ）」

「えー、次は十七階の資料室の清掃すね。十蔵さん、本業の方は（・・・）いいんですか？」

「妻に任せているから大丈夫だよ。さ、早く行こうか」

「うい」

実は十蔵さん、会社の清掃員なんてやってるが実はこの会社の親会社の社長なのだ。

視察の名目で十蔵さんの経営する会社の子会社で清掃をしながら横領やら賄賂、セクハラについて調べてるのだ。

・・・最初に聞かされたのは昼休憩だったな。

十蔵さん、奥さんの愛妻弁当を食べながら

「実は私は社長なのだよ春樹君」

って言われた時は飲んでいた珈琲を吐き出した。

しかも親会社の社長と聞いてビビって腰が抜けたりはしなかったが逆に納得がいった。

だって十蔵さん・・・清掃員なんて生温いオーラを纏ってるもん。

それも人の上に立つ親父に似たオーラを。

それからは十蔵さんとはたまに酒を飲み交わす仲になった。

奥さんとも会ったが若い。 歳（奥さんのために伏せるよ！）らしいが二十代にしか見えねーよ・・・。

「あ！また隠れて煙草を吸ってやがるな！ゴラアアアアッ！てめーらあああああっ！！」

「あ、やべ！春樹さんだ！」

「ヒイイイ！許してください春樹さん！」

十蔵さんからの頼みでたまに会社の規則を破るものを制裁したりしている。

そのせいか会社の老若男女問わずに“春樹君”とか“春樹さん”とか“アニキ”とか“親分”って呼ばれるハメになってしまったわけだ。

「煙草を吸うなら喫煙所で吸え！こんなところで吸ったらヤニ臭くなるだろうが！！」

「すんませんでした！」

「許してほしいければ食堂の日替わり丼を奢れ。あ。後はコロッケパシな」

「・・・春樹君、それは中学校のパシリとなんら変わらないよ」

これが会社で働く俺の仕事模様。

午前九時に始まり、正午に昼休憩、午後一時半に仕事再開。それからは午後五時半まで仕事をするのである。

「じゃあお疲れ春樹君。また明日もお願いするよ」

「十蔵さんも。また暇になりましたら行きましょつよ」

私服に着替えながら飲むジェスチャーをすると十蔵さんは満足気に頷いた。

十蔵さんと飲む約束をすると外に出てママチャリで一夏を迎えに行く。

その途中に働いていた全員に声を掛けながら幼稚園に一直線。

「あ、おとうさん〜!」

「悪い。待たせたか?先生、いつもありがとございます」

「あ、いえいえ!」

「ほら美弥先生、アタックアタック!」ヒソヒソ

「え、でもでも・・・私は・・・」

「じゃあ俺はこれで。一夏、乗った乗った」

「あ、ちょ、あの!」

聞こえない聞こえないーい!美弥先生の熱っぽい視線と慌てた感じの声は知らない!

・・・最近は何の先生方の目も肉食獣のそれだからマジ怖い。

というわけで退散。あんな空気の中にいたら死ぬる。

ママチャリを漕ぎながらチャリンチャリン家に向かう。

「今日の飯、餃子アルヨ」

「えー、おれはとんかつがいいな」

「つべこべ言つと飯抜き、アルヨ」

「ごめんなさい！・・・というかおとうさん、そのしゃべりかたなに？」

「似非中国人アルヨ・・・やめよう。なんかイライラする」

「ふーん・・・」

ママチャリを走らせながら一夏と恒例の幼稚園で何があつたかを話す。

前までは先生方の目が怖いとか言っていたが今は篝ちゃんや同年代の友達の事を話している。

取り敢えず先生方の話はスルー。俺も怖いもんよ。

「あ。おとうさん、ちふゆねえがいる」

「はい？千冬・・・いたわ。何してんのあいつら？」

「ちーちゃんちーちゃん、あの人の写真いらない？前に盗みど・・・げぶんげぶん！撮ったものがあるよ」

「全部寄越せ。ネガもメモリーもだ」

「毎度！報酬はちーちゃんのお愛……いだだだだだっ！」

「……ほお……シャワーの最中の写真があるのか……」

千冬がなんかデジカメや一眼レフの写真を見ながら束にアイアンクローしてるんだが……。

周りからかなり浮いているが話しかけるとしようか。

「おい千冬」

「……なんだ父さんか……何をしてるの？」ダラダラ

「……一夏を迎えに来て帰る途中なだけだが……千冬、鼻血出てるぞ」

「おっと。私としたことが……」

「ちーちゃん痛い……！！天才の束さんの頭が割れる……！！」

「むしろ天災だな」

「……妙にしっくりくるなそれ。ほらほら、さっさと帰るぞ」

学校帰りの千冬と束を加えて家に帰宅。

束は違和感なく我が物顔してソファにふんぞり返っていた。

「いつくんいつくん！ゲームやろうゲーム！東さんと勝負しよう！」

「いいよー！」

「帰ってきたら手洗いうがいだバカども。さっさと洗面所に行け」

「ぶー。いいじゃんそんな」絞め殺すぞ」「いつくん行こうか！」

うむ。素直なのはいい事だな。

ちよつと右手をバキバキ鳴らしながら笑いかけたら顔を真っ青にして洗面所に行ったよ。

え？酷い？そんなのは俺の辞書にはない。

「とつかおい。篝ちゃんとかと一緒にいなくていいのか？」

「東さんはあんなのよりちーちゃんやいつくん、貴方と一緒にいる方がいいよ。篝ちゃんはあれに気に入られてるし・・・」

PS3でアーマードコアやりながら東は寂しそうに呟いた。
取り敢えず柳韻、ジジイ。てめーら死刑。

東となるべく話したり付き合おうように言ったのにあの馬鹿二人は・・・
・頭が痛い。

「……今日は泊まってけ。お前の事だから着替えとかあるんだろ」
「……いいの?」

「普段から遠慮なんかしてないから今更だな。千冬、お前の部屋・
・喰われないように気を付ける」

「……ちーちゃんの……部屋……でへへへ……」

「父さん、部屋の変更を提案する。ベランダだ、ベランダにするんだ父さん！私はまだ乙女を散らしたくない!!」

「……難題にぶち当たったな」

この変態をどこに寝かせようか。

一夏は俺と寝るのが当たり前だから却下。千冬は一人で寝ているからそっちにしたら……千冬、泣くな。

「なら皆で寝るのは?……死ぬっ！このポンコツが！束さんの道を阻むでねえ！」

「それだ！束、たまにはいいこと言うじゃないか！」

「えへへへ、ちーちゃんに褒められたよ」

「……俺、確かお前が俺の布団に潜り込むの禁止にしたよな？千冬、貴様は約束を破るのか？」

「父さん成分が足りなくなっただから補充するだけだ」

「……なんだその未知なる元素は」

「というわけで今日は久しぶりに、本当に久しぶりに父さんのベッドで寝かせてもらおう」

「東さんはちーちゃんに抱きつく〜!」

「おれはおとうさんとねる〜!」

脳内会議……会議……会議……終了。

結論。諦めよう。

「もうやだ……どこで育て方を間違えたんだ……」

「大丈夫だ父さん。父さんの愛が強かったから今の私がいるんだ」

……今日の千冬、なんか壊れてる気がするな……。

なぜだ。俺は育て方を間違えたのか? いやいや、ちゃんと愛情を適度、過剰に注いでそれはもう、親バカレベルに育てたんだが間違えたのか?

ふと目を向ければ東と一夏はゲームに夢中。千冬はそれを見ながら自分も参加しているがイマイチの様子。

「ふははははは〜！東さんのミサイルを食らえい！！」

「なっ！くそっ！近接武器はないのかっ！」

「ちふゆねえがんばれ〜！」

・・・まあいいか。不自由なく、不便なく暮らせるなら何も言う事はないな。

台所に向かう途中にリビングにあるテーブルに乗るパソコンが目についた。

「・・・ロボット？」

東のパソコンらしく、そこには何かの設計図が書かれていた。

・・・
インフィニットストラトス
・・・“IS”？

駄目だ。わからん。アーマードコアの設計図やガンダムとかならまだしも、こんなのわかるわけがない。

昔は頭はよかつたんだがなあ・・・老いは敵だな。うん。

織斑春樹、三十五歳。

織斑千冬、十三歳。

織斑一夏、四歳。

寝るときに抱きつく千冬と東の母性の象徴に成長したなあと感じた。まる。

親父、穏やか？な一日。（後書き）

轡木十蔵登場。IS学園フラグが建ちました。

その他諸々ですけど。

ちなみに、原作一夏ラヴァーズにフラグは建たないことにしました。

誤解されてる方もいますが春樹は義理の父親です。近親相姦？見た目だけだろって思いますね。

実際に世界の富豪は30年下と結婚なんてあり得るし。

愚痴るのはこれだけにして。次回からちよくちよく時間が飛びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

織斑家の最強お父さん！

2011年11月7日09時38分発行